
Fratres フラトレス The Crazy Cafe

御奈坂 緋結華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fr a t r e s フラトレス T h e C r a z y C a f
e

【Nコード】

N 7 6 0 6 X

【作者名】

御奈坂 緋結華

【あらすじ】

時に働き、蹴り、殴り、撃ち、斬り、戦い、騒ぐ。
一風変わった喫茶店「フラトレス」で繰り広げられる、人外ギャグ
コメディ。

Prologue Day・0

長閑な朝の陽射しを浴びながら、俺は店のドアを開けた。

ふわりと漂ってくる珈琲の匂い。

誰よりも早く来る俺だけの特権だ。

店内に入ると、まずは窓を開けていく。

爽やかな風が入り込んできて、籠った空気を押し出してくれる。

換気を終わると、次は調度品の掃除。

朝と夜、毎日欠かさず綺麗にする。

テーブルを濡れた布巾で拭き、椅子の位置を整える、見た目から綺麗にしておきたいからな。

客席が終われば、そのままカウンターの内側へ。

前日に片付けた調理器具を並べなおして、倉庫から豆や葉を取ってくる。

湯を沸かしながら各機材のチェック、急に点かなかつたら困るからね。

沸いた湯を使って最初の珈琲を淹れる、うん、今日もいい感じだ。

開店準備も済んだところで、俺は淹れ立ての珈琲を飲みながら一服する。

紫煙がゆらゆらと漂う様を見ながら、俺は後から出勤してくる仲間を待つ。

起業して、この店を共にオープンさせた大切な仲間：なのだが。

「チツ、また寝坊してやがるなあいつらは。」

流石にそろそろ起きてもいい時間帯だ、そもそも9時から来ている俺でさえ割とゆっくりとした時間配分だろう。

と、そう思った矢先。

ドアに付けられたベルを鳴らしながら、4人の待ち人が入って来た。

眠たそうな顔が三つ、呆れ顔が一つ。
まったく、あれほど夜更かしはするなと言っておいたはずなんだがな。

「おいド阿呆ども、とつとと起きねえと今日のランチメニューに加えんぞコラ。」

「……どうして朝はまたやってきてしまうん？」

寝惚け面かました弟に渾身の回し蹴りをお見舞いする。

その勢いでテーブルの角に頭をぶつけると、声にならない呻きを上げてのた打ち回った、流石にこれで目覚めただろう。

暫くそれを眺めていると、突如起き上がり、天井に向かって唸り始めた。

「うおおおおおおおおおおおん！」

「まさか…暴走!？」

そのままの勢いで更衣室へと走っていく、チィ、馬鹿を一人取り逃した。

そして振り返る。

すでに一人は目覚めの一服を始めている、ああ、俺の珈琲まで…。
残った一人、図体だけ無駄にデカイ馬鹿はいまだ夢の中に居るようで、ふわふわとおぼつかない足元のまま更衣室に向かって歩き出す。
ふむ。

俺は迷わず、手にしていた煙草をその阿呆に押し当てた。

一瞬の空白。

「って熱い!? ちよ、酷っ! 兄さん、いくらなんでも酷くない?？」

「おお目覚めたか木偶の坊、とりあえずその薄汚い面に熱湯ぶっ掛けてしゃきっとしなさい。」

「火傷だよねえ！？確実にそれ火傷確定だよね！」

「ぎゃあぎゃああと朝っぱらから五月蠅い奴だな、だったらしっかりと睡眠とって働きにきやがれ。」

ぶつぶつと文句を言いながらカウンターで火傷を冷やし始める。

それを一瞥し、唯一しっかりと起きているらしい一人に話しかけた。

「すまないなカオリ、馬鹿が三人も居ると起こすのに手間取ったろ？」

「もう慣れたし、最近は物理的手段で叩き起こすから。」

「それは頼もしいことだ。じゃあカオリはレジのチェックを頼む、

俺は店の前を掃除してくるから。」

慣れた手つきで香織はレジへと向かい、俺は掃除用具入れから箒を取り出し店の外へ。

通勤や通学のラッシュを終えた商店街は、とても静かで寂れた雰囲気がある。

まあ何処の店もシャッターを閉めていれば当然なのだが、皆中で開店準備をしているのだから仕方がない。

俺は細かい砂埃を箒で掃き取り、舞い上がらないように水を撒き始める。

すると幾つかの店舗もシャッターを開け始め、少しずつ活気が満ちてきた。

もう30分もすれば朝市を目指した逞しい主婦の方々が、家の諸事を終え、買い物袋を携えて闊歩し始めることだろう。

何人か商店街の人々が挨拶をしてくれたり、今日も頑張ろうと応援してくれたりする。

うん、この雰囲気は俺はとても好きだ、夢見ていた景色そのものと言えるね。

俺は掃除を済ませ、お隣の店舗のご主人に挨拶を終えると、晴れや

かな気分で店内に戻った。

まあそこで気分は一変するが。

まず、先ほど俺の珈琲を奪い取って一服をしていた男、ヒロトがテーブルに突っ伏して寝ている。

次は俺に煙草を押し当てられたアホ、ホカゾノがウザってえテンションで珈琲を淹れる練習をしている。

……まあこれは別に間違っていない、単に鬱陶しいだけだ。

そして更衣室に暴走しながら走っていった弟、キヨシが珈琲を待ち望む客のようにカウンターで煙草を吸っている。

カオリは既にレジの起動を済ませ、更衣室に向かったようだ。

俺はベストの内側に忍ばせていたガスガンを取り出すと、その三人に容赦のないマガジン掃射を決めた。

むくりと起き上がるヒロト、大丈夫、ヒロトは起きれば働いてくれる、単に低血圧な所為で朝が驚異的に弱いだけだ。

次に弟くんへと狙いを定める、既に逃げ始めている辺りは慣れている。

「まあ逃げるなよ弟くん、逃げたって結局は同じなんだぜ？」

「いやだって仕事はもう済んだし、珈琲くらいは良いでしょ!？」

「その仕事とはいったい何だ？」

「あ……着替えるでしょ、店を見て回るでしょ、今日も兄さんはきちんと仕事をしているなって感心するでしょ……俺は今日も頑張ろう！」

「そうかそうか、そんなに閻魔様と珈琲を飲みたいか。」

迷わずに撃ち続ける、悲鳴が木霊する。

ガシヤッ!

チツ、弾が切れた。

俺は新しいマガジンをリロードすると、既に見える範囲から消えているド阿呆を探しに出かける。

弾薬を薬室に装填し、猫なで声で声を掛ける。

「トシユキくん、馬鹿だから拷問DEATH!」

「何で!?!?てかウチは特に悪いことしてないじゃん!」

「おやおやく?そつちから声がしたなあ。」

俺は最高にハッピーな笑顔で靴音を響かせながら、ゆっくりと裏手の倉庫へと足を向ける。

中で恐怖に慄く馬鹿の顔を想像すると、今日も一日頑張ろうって気分になるね、ゾクゾクシチャウ。

扉をゆっくりと開けると、中にはこちらに引きつった笑みを向けるカスが一匹。

「さあ、楽しい殺戮シヨーと洒落こもつか。」

「いやいやいや!だから何故ウチに撃つの!?!」

「うん………ただの気分かな、一日の始めに精神のハリを取り戻さないとき。」

「めっちゃとばっちり!?!」

「まあそついうことだから、おとなしく死んでくれや。」

何か言おうとするのすら遮るように、俺は幸せいっぱいな笑い声と共に銃口を馬鹿へと向けた。

こうして俺たちの店、フラトレスは開店する。

7月25日 Day・1

……ミーンミーン。

……ミーンミーンミーン。

……ミーンミーンミーンミーン。

ウザい。

これ以上ないほどにウザい。

ただでさえ今朝の事で機嫌が悪いのに、このクソツタレなオーケストラの所為で尚更イライラする。

あのド阿呆が食器を割る音の方がよっぽどマシだ、溜まった分のストレスをいくらか発散できるからな。

馬鹿の骨が奏でるリズムはたまらねえ、管楽器にも負けない音色だ。それに悲鳴のコーラスと血の飛び散る拍手まで加われば最高なんだ、皿一枚くらいの損失なら安い。

……ぶるる。

ヤバいな、思い出したらゾクツと来た。

さ、今はそれよりも早急の用を片付けるとするかな。

この忌々しい暑さから抜け出すには、とっとと仕事を済ませて涼しい我が家に帰るのが一番だ。

……一応帰りに店を確認してから寛ぐつ、下手をすれば店が半壊してても不思議はねえ。

蟬の非生産的な雑音を必死に無視しながら、俺は目的の店へと向かう。

隣町の珈琲豆専門店。

いつも俺が豆の注文をしている中々の優良店だ、店長さんとも仲良しだし。

別にわざわざ歩かず素直に電車を使えば良いのだが、無駄な金は使いたくない。

住宅密集地帯の並木道を気だるげに歩きながら、滴る汗を拭う。

そろそろ車の免許でも取るかな。

学生時代から取るうと思いつつ暇がなかったからなあ、時間は掛かるけど休みの度に教習所行くか。

意外に早歩きだったんだらう、気が付けば駅前の繁華街に着いていた。

てか通り過ぎてるし、かつたりい。

少し戻って目的の店に入る、ああ涼しいって幸せ。

カウンターに立つ店員が俺に気付いて笑顔を向けて会釈する、相変わらず店員の質は良いな、ウチの馬鹿共も見習ってほしい。

適当に手を振って奥の事務所に入っていく、ちゃんと許可は取ってあるぞ、不法侵入じゃないから。

戸を開けると中で店長の板橋さんが珈琲の味見をしていた。

「こんにちは板橋さん、また新しい銘柄仕入れたのか？」

「お、また直接来たのかい？電話くれたら配達に行くのに、暑いのに真面目だねえ。」

「格安で仕入れてもらっておいでそこまでさせられないツスよ、それに毎回のお礼も兼てるんだから。」

「気にせんで良いのに。まあ座りなよ、折角だし飲み比べしていくかい？」

「面白そうだな、是非とも。」

俺はパイプ椅子を引き寄せて座ると、板橋さんが幾つかの珈琲を出してくれる。

「ちょっとマイナーな制作者だから味は判らないが、香りは悪くないよ。」

「エメラルドマウンテンに似てるな、んじゃいただきます。」

俺は全部の珈琲を少しずつ味見する、合間に水を挟んで僅かな違いを楽しむ。

「うーん、こいつはイマイチパンチに欠けるな、これはアイス向けの味だ、こっちはエスプレッソかな。」

「結構感覚が良くなってきたね、頑張ってるじゃないか。」

「サンキュー。とりあえずウチでもちよっと試してみるから、これとこれを追加で少し貰えるかな？ここに今日の発注分が書いてある。」

「了解、ちよっと待ってな。」

板橋さんが発注書を見ながら奥の倉庫にいなくなる。

しかし、相変わらず気楽な店長だ、だからこそ取引先をここに決めたんだが。

暫くすると板橋さんが注文品の入った紙袋を持って倉庫から出てきた。

「てか君は今日非番かい？私服なんて珍しいじゃないか。」

「今更だね店長。ああ、久し振りの休みだよ。あの馬鹿共に店を預けるのは不安すぎるからな。」

「休みの日まで仕入れとは働き者だな。もし時間があるなら車で送

ってあげよう、在庫確認の途中でね、終わるまで珈琲でも飲んで待つてなさい、30分くらいで終わるから。」

「良いんですか？助かるツス、暑い中帰るのは億劫で。」

笑いながら板橋さんが珈琲を淹れてくれる、この匂いはエメランの最高級だ、毎回ありがたいね。

さて、待っている間に店へ電話でもいれとくか。

俺は携帯を取り出すと、店の番号を呼び出して通話ボタンを押す。数回のコール音のあとで、向こうと繋がった。

「はい、フラトレス珈琲店でございます。」

「カオリか、俺だ。」

「ああ、どしたの？用事？」

「いや、店は……と言つより馬鹿共はちゃんと働いてるか？」

「うん、珍しく食器も割らないし真面目に働いてるよ。」

「なら良かった、引き続きしっかり頼むわ。何か買ってきて欲しい物はあるか？」

「あたしはないけど……ねえ、何か欲しいものあるかだって。」

するとドタバタ音がして、蝉にも負けない音量で声が聞こえる。

「俺はアイスが食べたいよお兄さん！安いのをできるだけ！」

「「煙草！！」」

「判った、特になさそうだな。板橋さんに送ってもらつから帰りはもう少し遅くなる、それじゃな。」

「気をつけてね。」

最後に背後で騒ぐ声があったが、とりあえず放っておこう。

それから美味しい珈琲を飲みながら板橋さんを待っていた、たまには静かな場所も良いな。

ゆっくりとした時間が流れる場所は、自然と心を落ち着かせてくれる。ウチの店もそうしたいのだが、最近じゃあの騒がしさを楽しみにして来る常連さんが増えちまった、まあ売り上げが安定するのは良いことなのだが。

すると、在庫確認を終えた板橋さんが戻ってきた。

「待たせて済まないね、それじゃ行こうか。」

「わざわざすみません、ありがとうございます。」

「気にしなくて良いよ。先に幾つか寄るところがあるから少し時間は掛かるけどね。」

「大丈夫ツスよ、お願いします。」

板橋さんの車の乗り込むと、幾つかの取引先に立ち寄ってからフラトレスへと走っていく。

フラトレスがある木野塚商店街に着くと、車は静かに停止した。

「ありがとうございます、助かりました。」

「またいつでも来なよ、新しい豆を用意しておくからさ。」

会釈すると車が走り去っていく。

俺はまた暑い夏の商店街を歩きます。

途中駄菓子屋に立ち寄ってアイスを買ひ、煙草屋でセッターを二箱買っていく。

さらにパン屋でケーキを買つと、両手に大荷物を抱えて店に向かう。にしても暑いな、店なら涼しいだろう。

だが、何か聴きたくはない音が聞こえてきた。

皿の割れる音と、笑い声。

嗚呼、折角わざわざ買ってきてやったというのに。

俺は先に自宅へとケーキ等を運び込み、倉庫へ豆をしまってから自

室へと向かう。

壁にかけてある刀を掴むと、俺は騒がしい店内へと歩いていった。

暫く悲鳴が途絶えなかったのは言うまでもない。

8月4日 Day・2

相変わらず暑い日々が続いている今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか。

俺は苦手な暑さと戦いながら、毎日一生懸命仕事をしている。

朝は早くから料理の仕込みをしたり、店の前を掃除したり、意外にやる事が沢山あるんだ。

でも眠気は朝の静謐な空気を吸えば落ち着くし、体を動かしていればけだるさも抜けていく。

でも忙しいからって鍛練は怠らない、今でも毎日刀と銃には触れている。

……毎日馬鹿が下らない戯言を欠かさないからね。

まったく、その所為で店の壁には刀と銃が掛けてある、いつでもすぐに使えるようにさ。

別にウチはミリタリーショップでもなければ和風の茶菓子を扱っているわけでもない。

静かで落ち着ける場所を目指した、普通に洋風の喫茶店だ。

本当はこんな物騒な物は店の景観も損ねるし置きたくはない、何より趣味で集めた物は部屋に置きたいのだが……。

だってさ、アンティークな調度品に混ぜって日本刀とショットガンが置いてあるっておかしいじゃないか。

最近は見慣れてきて調和がとれてきちゃったから、それが凄いい嫌だ。

「おっはよー兄さん、今日も早くからご苦労さん！」

俺は躊躇いなく壁のショットガンを掴むと、素早くショットシエルを装填し、薬室に弾丸を送り込む。

僅か0.5秒の動作スピード、慣れ過ぎた、戦場かここは。最早見なくても馬鹿の眉間を撃ち抜けるテクニク、片手でも手ブレなし、プロだねこりゃ。

指に力を込める、扉が開くと同時に撃ちだす。扉が開き、俺はトリガーを握る。

俺は無理矢理、弾丸の軌道を変えた。

既に発射された弾が銃口から飛び出すよりも速く、銃を上蹴りあげる。

弾は銃身内でぶつかり、天井に向けて撃ちだされる、ああ、また電球が割れた。

さて、この始末はどうつけようか。

馬鹿のとつた行動は単純明快、要は俺が撃てないようにすればいい。少しは賢いじゃないか、まさかカオリを盾にしながら入ってくるとはね。

確かにこれでは撃てない。

いや俺は撃つたが軌道を変える必要になった、無茶な動きをしてでもだ。

事実馬鹿は被弾せず、今も驚いた顔でこつちを見ている。

「うわ、撃つてきやがりましたよお兄さん。」

「でも無理矢理当たらないように蹴りあげてるし、相変わらず化物だなあ兄さんは！」

「ふむ、蛆の湧いた脳みそで考えた割には賢い回避法だなあクス共。」

「でしょ！流石はウチのおつむ、いやいや誉めないで、ノーベル回避賞は後日ね。」

「……………だけどさあ、ちよつとだけ間違えたよなあ、うん、少しだけ詰めが甘いよ。」

カオリは掴まれていた腕から逃れると、一目散に事務所へと走っていった。

「完璧な作戦勝ちだよ兄さん、負け惜しみは潔くないなあ。」

「君の低能ぶりは怒りを通り越して哀れみさえ感じるよ。あのさあ、盾を使うつてのは賢いと思うよ、カオリを盾にするのも正解だ、俺がお前らに撃てなくなるからな。でもそこで気付くべきだった、間違えたよなあお前らは……………盾にした人が俺にとっての何なのか、もっと深く考えるべきだった。」

俺はショットガンを壁に戻すと、カウンター席の板を外し、中から彼のブリテン王が振るいし剣を取り出した。

「そんな所に隠し武器が!？」

「さあて、今日は釣りに出掛けよう。黄泉でバス釣りと洒落込もうか……………お前達だけだがなあ！」

数時間後。

「こんちはマスター、いつもの珈琲……………どうしたトシユキくん、その顔は。」

「いえ、何でもないツス……………」

「いらつしゃいませ沢井さん。そのクズはお気になさらず、どうぞこちらの席へ。」

「彼はまた何かやらかしたのかい？」

「お恥ずかしながら馬鹿の教育不足でして、怖いもの知らずで困ります……そうだなあ？」

ヒィと小さく悲鳴を上げ、傷だらけの馬鹿がテーブルを必死になつて拭きあげる。

沢井さんは苦笑しつつ、俺が淹れたブレンドを飲む。

「うん、やはり朝は珈琲だね。」

「その通りですね、私も朝から暴力ではなく珈琲を楽しみたいですよ。」

「あはは……。そういえば昨日までそこに掛けてあつた刀はどうしたんだい？」

「今朝、天寿を全うしましたが…何か？」

沢井さんが身震いしつつ、哀れみの目でホカゾノを見る、黙祷までしてやがる。

さて、そろそろお昼時だな。

「そのカス、厨房に行つて準備しやがれ。涙で味を変えたら……言わなくても判るよな？」

鬱陶しいくらいにわざとらしく走っていく。

チツ、もうふざける程度には回復しやがったか。

それからは忙しかった。

流石にこの時間帯はふざけてる余裕もない、カオリを呼んで五人で目まぐるしく働く。

大体は気が付けば15時を過ぎている。

そろそろ休憩を挟むか。

「その馬鹿二人とヒロト、ちよつくら休憩行ってこい。カオリはもう少し待ってくれ。」

「んじゃ〜行ってくる〜。」

「さ〜て煙草だなあ。」

「疲れた〜。」

ぞろぞろと気の抜けた三人が厨房の奥に消えていく、少しは客に気を遣え。

溜め息を吐いた俺を、カオリと一部のお客さんが苦笑して見ている。

「一緒に休憩してきたら？落ち着いてるし、あたしでもどうにかなるよ。」

「…すまん、忙しかったら呼んでくれ、どちらにせよすぐ戻る。」

店をカオリに託すと、厨房へと入る。

厨房の奥の倉庫に裏口の扉があるんだ。

吸い殻を適当にされると厄介だからと、わざわざ吸い殻入れまで用意したスペース。

「いやあ、それじゃつままないでしょ!」

ん?

何か会話に熱が籠もってるな。

気配を消して、とりあえず聞き耳。

「そろそろライオットシールドを買ってちゃんと防がないと流石に死ぬよ。」

「いや、それなら鎖かたびらでしょ。不意に斬られても大丈夫!」

「いい加減やめとけば良いじゃん。」

良いこと言ったなヒロト！

てか斬られること前提の会話を初めて聞いたわ、しかも自然な雰囲気なのが謎すぎるだろ。

流石に今日はやり過ぎたか？

頭の何処かが更にいかれたのかもしれない、加減するべきだろうか。

「あ、名案を思いついた。」

……何だか嫌な予感しかしやがらねえ。

「兄さんの刀を奪えば良いんだ！」

……あん？

「兄さん秘蔵の大典太とか、あの辺りをウチらが構えてたら攻撃できないでしょ、兄さんの破壊力じゃ確実に叩き斬るし！」

「確かに、傷もつけたくないから銃も撃てないな。……どうしたヒロト、どこ行くの？」

無言でヒロトが遠ざかるのを感じる。

流石はヒロト、危険察知が上手くなったな。

そこに居たら無関係でも無事じゃ済まないからさ。

キィ……………。

振り替える二人。

最高の笑顔の俺。

「や……………やあ兄さん、に、兄さんも休憩……………かな？」

「ああ、そうだよボブ。ボクはとても疲れているからね、ははは。」
「あ、あはは……ボブ、まさかお兄さんは俺たちの会話を……。」「
「ハハハ、まさかそんな……ねえにいさグハア！」
「テメエが探してた刀はこれかあ？」
「あ、相変わらず至るところに隠してあるね…お茶目だなあ兄さん
は。」
「辞世の句はそれでしまいか？」
「兄さんそれ今世紀最高のギャグ。」
「……滅殺？」
「何で疑問文ー！？」」

さて、今日も変わらない毎日だね。

8月17日 Day・3

夕方になり、静かに夜の帳が落ちる頃。

俺は既に閉店作業を進めていた。

食器を棚に戻したり、グラスを布巾で磨いたり。

このゆったりとした時間が俺は好きだ、今日は邪魔な奴らも出払ってらる。

今日は近くに流れる九十九川^{つくも}で、年に一度の花火大会がある。

俺たちが店を出している商店街も積極的に参加していて、今回からは俺たちも出店を開くことになったんだよ。

正直言つて金にはならない。

祭りを盛り上げると宣伝を兼てるから、まあ出来る限り安く提供しようって事らしい。

用意した物売り切れればプライマイゼロ、売り切れなきゃ赤字が確定、要は生産性なしの残業なんだが。

またどういわけかあの馬鹿共がテンション上がったちゃってさ、やる気出してるし、付き合いつてもんもあるからなあ。

物凄く渋々OKを出したんだが、あの時のアイツの言葉が不安でならない。

「兄さんはお客様だから、手伝わなくて良いから！」

や、偉そうな事を言いやがるけど出費は俺の金だからね？

まあ資材調達から会場準備まで全部自分達で頑張るからなんて言われたからね、ちょっと感動しつつ頑張れなんて言ってしまったわけさ。

後で通帳を確認したら少し……いや、かなり予定よりも金が減っていたが。

でもこれも勉強だよな。

これで資材調達とか任せられるようになったら俺も楽になるし、最初の頃は俺だつて失敗してたし。

それに結構期待してるんだよな、あいつらそれぞれの休みの度に調べたりしてたみたいだし。

……一応力オリを監視役にしたから多分大丈夫だろ。

時計を見てみると既に19時を過ぎている、丁度花火大会が始まった時間だ。

花火を打ち上げるのは確か20時くらいだったかな、今からなら間に合うか。

最後のグラスを磨き終わり、店の防犯を確認していく。

制服から私服に着替えて、よし、行こうかな。

人気のなくなった商店街を、九十九川に向かって歩いていく。

通学路に出ると、はしゃぎながら走る子供達が脇を抜けていった。いつもなら注意するけどさ、今日はご愛嬌かな。

川沿いに出ると、そこは光の森だった。

川の左右に出店の光が並んでいて、独特の賑わいをみせている。

何処の出店にも出店者の店名が看板になってる、凄い判りやすいな。さて、ウチの店はどの辺りにあるんだろうな。

あいつら一切位置を告げないで行きやがって、この中から探すのは大変だつづつの。

ん、たこ焼きじゃん。

店名は……ああ、惣菜屋の菅野さんか。

「いらつしゃい！お、喫茶店のマスターじゃないか、珍しく私服だなあ。」

「あはは、お疲れ様ツス。」

「あれ？でも確か出店出してなかったか？兄ちゃんは休みかい？」

「ああ、なんか他の奴らが頑張るからって。だから労いの品を買いに。」

「そうかいそうかい！ならこれ持ってきな、二つくらいで良いかい？」

「ありがとうございます、ではまた惣菜買いに行きますね。」

テンション高い菅野さんから出来たてのたこ焼きを受け取って、会釈しつつその場を離れる。

はあ、相変わらずクソたけーテンションだよまったく、無駄に疲れるなあれは。

土手添いに並ぶ出店に視線を巡らせながら、馬鹿の出した店を探す。

すると、凄い賑やかな一角を見付けた。

そして何故だか溜め息が出た。

何となくだが、あれがウチの出店に思える。

まず看板に「超美味い？これが噂の！」って書いてある、最悪に汚い文字だが。

大体看板に疑問符浮かべてる時点でまともな気がしない、それに最近出店の噂などまったく聞いていない。

何が怖いって、何を売ってるのかが書いてない、食べ物だろうと言うのは判るが。

「食いやがれー！美味いに決まってるのさー！」

「暇なら食べ、腹一杯食べよー！」

「もぐもぐ……美味いよこれ。」

ソースの匂いがするから、焼きそばかなあ。
匂いは美味そうだ、こういう場所だと尚更だな。

「よお、意外に盛況じゃないか。」

「へいらつしやい！美味しいよ焼きそば、お兄さんも食ってきな！」

「いやウゼえから、もうそういうノリはお腹いっぱいだから。」

「ノリ悪いねえお兄さん、冷やかしたら帰んな！」

「……仕方ない、この差し入れは俺が一人で食うかな。」

「お疲れ兄さん！流石は兄さんだぜ気が利いてるなあ、もうこの照れ屋さん。」

「いただきます。」

「いやごめんなさいマジ調子乗りました。」

「初めから健気にそう言えば素直にくれてやるのに。」

俺は屋台の裏側に回ると、置いてあったテーブルに袋を置く。

「さてヒロト、ちょっとお兄さんとお話しようか？」

「いや、大丈夫。」

「黙りなさい阿呆予備軍！何でお前はもりもりと焼きそば食いやがってる？」

「腹が減ったから仕方なく。」

「ったく、赤字が確定する様を身内に見せられるとはな。カオリはどうした？」

「今は休憩。アイツらが頑張ってるから暇だつて。」

「だろうな、アイツら無駄に清々しい顔してやがる。ウザいうえに暑苦しい、おまけに呼び込み方に礼儀がなさすぎる。まあ残念なこととにそれが最近じゃウチの売りになってるが。」

てかマジで売れてるな、あのテンションの高さが客を呼んでるのか。

またあの馬鹿は調子に乗りそうだ、鬱陶しいだろうなあ。
振り替えると既にヒロトがたこ焼きを貪っていた、どんだけ食うんだこいつは。

「んじゃ〜ちよつとしたパフォーマンスといきますか、キヨシ！」

「はいよ！さあ燃え盛れお兄さんの秘蔵酒！」

「おのれ貴様ー！」

俺が買っていた高級梅酒が、焼きそばなんぞをフランペしてやがる。
次の休日に飲もうと思ってたのに…。

「やーめーろーよー、高いんだよー。」

「あ、兄さんが泣いた。」

「あつはつは、これで邪魔者は戦闘不能だぜ！」

「さあやりたい放題だ！みんな見てごらん！この梅酒の炎の向こう
には、なんと悪魔がみつともなく泣き喚く貴重な光景が！」

「ほらほらもつと燃えるぜーってギャース！俺の前髪がー！」

あはは、あははははははは。

だから嫌になる、自分の浅慮さに腹が立つ。

やはり馬鹿で阿呆に店を任せるなんて間違이었다、夢物語も甚だ
しい。

カオリがいなくて良かった、俺が起こす光景は壮絶だからな。

実はこの時は既にカオリは帰っていたらしいのだが、俺がゆらゆら
と馬鹿共に歩くのを見て静かにヒロトを避難させたらしい、懸命な
判断に恐れ入る。

俺がズボンの裾に隠していた忍者刀を二本取り出すと、お客様が笑
顔のまま後ろにさがった、お気遣いに感謝致します。

左右逆手の体勢で、躊躇いなく二人の首筋に振り下ろした。

だが流石は百戦錬磨のゴミカス共、抑えきれない殺気を感じて一瞬

で避けやがった。

置いてあつた酒ビンが、代わりに首とさよつなら。

「ヤバいねキヨシ、兄さんガチだ。」

「まさか真剣まで手に入れていたとは、流石はお兄さんだぜ！」

「いやいやその前髪チリチリ、冗談じゃなく殺されちゃうよ！」

「空から見下ろす世界はきつと美しいだろうなあ。」

「既に死亡確定！」

「ふはははははは！神も憐れむゴミ共め、悪魔を怒らせた痛みを知るがいい！」

そこからは大暴れしたからあまり記憶にない。

覚えているのは、細切れになつた服を必死に抱えながら走る馬鹿共と、それを見越したカオリがヒロトと一緒に店を回す光景だった。

9月2日 Day・4

「39・2、完全に風邪だね。」

「うう、最悪だ。ゴホゴホッ！」

「お盆まで働いてたもんね、疲労で体調が崩れたんだよ。店は……あいつらはあたしが見とくから安心して休んで。」

「すまん、助かるわ。」

冷えピタを額に貼って横になった俺は、心配そうな顔をして出ていくカオリを見送った。

とたんに部屋が静けさに包まれる。

街の喧騒は遠い。

それも当然か、この家は店の裏手にあるからな、この時間帯はまだ子供も帰ってきていないだろう。

時計には10時12分と表示がある、いつもなら馬鹿共を叩きのめし終わって漸く落ち着いた頃だ。

……大丈夫かな、何かスゲー不安になってきた。

ちゃんと仕込みは終えたかな、今更珈琲が淹れられないとかないな。

まさか未だ扉に「closed」なんてぶら下がってないよなあ……。

ああ、心配だ、全力で見に行きたい。

でもダメだ、身体がいうことをきかん。

久し振りの風邪のせいかな、こんなに深刻だとは。

うう、ダメだ。

クソがテメエ今それどころじゃねえ！

全速力で熱さの原因を叩き落とす、何だこれぐちゃぐちゃしてる。そして馬鹿はまだ笑ってやがる、「冗談じゃねえ熱すぎる。」

俺は布団から這い出して枕元を見た……………お椀？

白い何かが布団に散りばめてある、多分お粥。

見上げると腹を抱えてヒーヒー言ってる馬鹿がいる、その手には別のお椀と蓮華。

とりあえず全力でぶっ飛ばした、そりゃあもう風邪が悪化しそうなくらいに。

漸く痛みが引いたところで、馬鹿を踏み潰しながら問い掛ける。

「おい貴様、一体これは何の冗談だコラ。」

「酷くない！？ウチは兄さんの為を思ってお粥をお持ちした次第ですよ！？」

「ほお、そりゃあご苦労なこった。で、何で俺の顔にお粥が降ってきたんだ？」

「それは兄さんがいきなり殴ったからじゃん！」

「そんなifは知らん、死ねやボケエ！」

「理不尽！？」

再びラツシュ、格ゲーなら連打系の必殺技が出てる。

ひとしきり殴ったら、とりあえず汚れた枕や布団を取り替える。

ぴくりとも動かなくなった馬鹿は端に蹴り飛ばし、半ば朦朧とする意識の中で洗濯機を回しに行く。

洗っておけば放置するよりはマシだろう。

にしてもヤバいな、流石に暴れすぎたか。

部屋に戻ると馬鹿は居なくなっていた、あれだけ痛め付けたのにまだ生き返るか化け物め。

あー、もう良いせ、寝たじ。

……。

……。

……。

ピコピコ、ドカーン！

……。

ザシュッ！ザシュッ！

……。

てってねってー、てててててー！

「あのまじロト。」

「はい？」

「ゲーム楽しいか？」

「これはちよっと簡単すぎますよね。」

「そうか。」

「はい。」

……。

じつじつ……じつじつ。

「あのまじロト。」

「はい？」

「俺が風邪を引いてるって知ってる？」

「知ってますよ、だからこうして看病に来てるんです。」

「だったら頼む、気になるからゲームは余所でやってくれ。」

眠れないのはマズい、流石にそろそろちゃんと休まないと。

「ああそっか、判りました。んじゃ俺は店に戻るんで、何かあったら店に電話ください。」

「ああ、そうするよ。」

ヒロトとピコピコが遠ざかっていく、やっと寝れる。

でも何だかんだと二人とも優しさで来てくれたんだよな、ちょっとくらいは我慢すべきだったか。

「ところがどっこい、世の中そんなに甘くない眠れない!」

「帰れ。」

「随分冷たくあしらうじゃあないか?」

そりゃ冷たくもなる、阿呆がマイク持って現われたらな。

もう二度と見たくなくらい最高に楽しそうな笑顔だ、いや参った、絶対確実に不吉だねこれは。

「さあ、傘に穴が開いてないか確認する作業に戻ろうか。」

「いや、俺はそんな地味な働き者じゃないぜ!」

「これはあれだな、純度100%で嫌がらせだな?」

「むふふ、いやいやお兄さん、ボクがそんなことするように見えま
すか?ぷぷつ。」

「ニヤニヤしながらマイク持参で病人の部屋に来たら間違いなく嫌
がらせだろうド阿呆!」

「違いますとも、俺はお兄さんが安らかに眠れるように子守唄を歌
うため馳せ参じた次第でございますのことよ!」

「よし帰ろう、今すぐ帰ろう、さあ帰ろう!」

「まあまあとりあえず一曲目いつてみよー！」

このあとはひたすらに地獄のメドレーだ。

俺は必死に眠ろうとした、アニソンが響き渡る自室で。

体力があれば刹那の時間さえかけずに塵へと変えてやるのに、ああクソつたれ。

耳を塞ぎながら布団に籠もっていると、もう一人の馬鹿が乱入してきた。

「そんなことより俺の歌を聴けー！」

「なにい！おのれ、負けるか！唸れ俺の美声！」

「ふふん、天使の声と言われたウチに勝てるかな？」

ああ安心しろ、どちらも下手ではないだけだから、確実にお世辞だから。

最高にハイなテンションで歌いまくる二人、頼む死んでくれ。

ひとしきり歌い終えて、馬鹿共が俺に向かって問い掛ける。

「どつちが上手かった？」

「どつちでも良いわ馬鹿共が！もういい貴様ら表へ出る！」

「そこで現れるのが真打ちってもの。」

「ヒロト!？」

「さあボクの歌を聴くんだ。」

紡ぎだされるメロディ、まさに美声、先程までのジヤイアン共とは比べるべくもない。

流石にこれは聴いてた、出てきたタイミングは最悪だったが。

てかさつきから気になっていたんだが、毎回ちゃんと伴奏がついてるのはどういふカラクリだ、いつの間にスピーカー仕掛けがあった。

「ブラボー！」

「自分で言った!？」

「わたくしも負けられませんわ！」

「誰!？」

「ま、敗けてなんかやらないんだから！」

「ツンデレ!？」

はあはあ、結局ツッコミなのか俺は。
ダメだ、もう体力が……。

……………。

「大丈夫？」

「ああ、お陰さまでぐっすり眠れたよ。」

「あいつらはキチンと叱ったから、今は反省文を書いている。」

「昔から特にあの馬鹿は反省文が好きだな、遅刻の常習犯だったか
ら。」

「まだたまに寝坊するけどな。」

「その分生傷が減らないけどな。」

「そうだね。じゃあもう寝ようか、明日からまたよろしくね。」

「ああ、任せておけ。」

……………。

「ふははははは、死ぬクス共！」

「あはは、兄さんが最高に楽しそう、死ぬかもなあこれは。」

「良いから走れ、諦めたらそこで人生終了!！」

「わお、諦めるってめっちゃ重い！」

「貴様らの額もあの皿たちのように粉々にしてくれるわー！」

はい、今日もいつも通りです。

パリーン！

「……………」

「……………」

「なあ馬鹿野郎、今日は何枚目だ？」

「えっと、俺は二枚目？」

「ポケろつったか teme エ！」

「ちゃんと報告したやんかー！」

「temeエのどこが二枚目だとポケエ！鏡見て生まれ変われカスガ！

！」

「そういう意味じゃないー！」

「お兄さん荒れてるなあ、この間の風邪の時にふざけすぎたかな？」

「いい加減にしないとそろそろ本気で殺されちゃうよ？」

「いやいやカオリさん、お兄さんはいつでもガチで殺しにきてるか

ら。」

「ねえ珈琲まだー？」

「ヒロトくん、仕事しようか。」

あの風邪を引いた日。

翌日店に行くとき皿の数が半分に減っていた。

これはアレだ、神様が殺しても良いんだってお許しをくれたんだな。元気になった体で渾身の抜刀術、馬鹿野郎共は瀕死。

余計な出費がかさむ。

折角節約してとあるイベントを企画していたのに、お陰で一週間先延ばし。

お客様にも恵まれて、今日の売り上げが入ればやっと取り戻せる。

中止にしようか迷ったが、一応雇用者の俺としては夏休みの代わりを作ってやりたい。そろそろ話すかな。

半殺しにした馬鹿を放置して、洗い物をしている二人に声を掛ける。

「来週は三日間店を閉めるから、それぞれ準備をするように。」

「あれ、何かあるの？」

「夏休みが取れなかったからな、ちょっと皆で二泊三日の温泉旅行を企画してみた。幸い今年の夏は売り上げも良かったからな。」

「やったー！パリンッ！」

「……………でだ、多少余裕を作りたいから今週は頑張ってくれ。」

「ツッコミ諦めたね。」

「よっしゃー、気合い入れて売りまくるぜー！」

「なあ板橋さん、何か食べよー！」

ゴッ！

「失礼しました。板橋さん、気にせずゆっくりしてって下さい。」

「……………トシユキ君死ぬよ？まあ折角だし私もカンパしよう、珈琲のおかわりとBLTサンドを貰おうかな。」

「気を遣っていただきすみません。カオリ、BLTを一つ頼む。」

「はい。板橋さん、ありがとうございます。」

「気にしなくて良いよ、ここは落ち着けるからね。」

「おいヒロト、塵に変えるよ？」

「さて、夕方からのタイムセールに行かなくちゃ。」

慌てて店の財布を掴み走り去るヒロト、まあ働くならばいいか。

「おい愚弟、今の内に倉庫の整理と在庫管理してこい。」

「Sir, yes Sir！」

「普段からあれくらい働けば良いのに。」

俺は呆れつつも珈琲を淹れて、ベーコンの良い匂いのするBLTサンドを板橋さんに手渡す。

「ありがとう。来週は新作のブレンドが完成するから週末にでも届けさせるよ、ラテにすると美味しいよ。」

「それは良いですね、最近ちょうどラテの注文が増えているので。」

「客層が変わったのかな？」

「はい、高校生が増えてきましたね。お陰で夕方以降は賑やかになってますよ、文化祭が近いみたいで。」

「話し合いでもしてるのかな？」

「そうみたいです。喫茶店を計画してるらしくて色々と相談されました、その内豆を買いに行くと思いますよ。」

「お、斡旋してくれたのか、ありがとう。」

「まあ高校生なんて少し割引くらいしてやってください。」

「ああ、良いのを探しておく。」

するとちょうど賑やかな話し声が聞こえてきて、間もなく件の高校生生達が入ってきた。

「マスター、この間の話どうなりました？」

「ちょうど良かった、そちらにいらっしやるのが例の珈琲豆を扱ってる板橋さんだよ。板橋さん、ちょっと相談に乗ってあげてくれますか？」

「勿論だとも。こんにちはお嬢様方、私が板橋だ。こんなオッサンで良ければ私が教えてあげよう。」

「やったー、ありがとうございます！マスター、昨日と同じ組み合わせで四人分お願い。」

「うん、任せなさい。そっちの広いテーブルが良いだろ、カロリーは

タマゴサンドを四つ。」

「じゃあ待っている間に何を出すのか教えてもらえるかな？」

それから暫く会議をする五人を横目にしながら、混みはじめた店を回していた。

結構真面目に話を聴いていたようで、板橋さんが帰る時に妙に嬉しそうだった。

旅行を宣言したからか馬鹿野郎共は真面目に働いていた、これからもそうしてくれたら殺さなくて済むのに。

因みに真・馬鹿野郎無双のカスは終始気絶していた、当たりどころが悪かったか、まあ邪魔だから蹴り飛ばしておいたが。

そのまま週末まで忙しく、割れた皿の数が奇跡的に一枚だけという最高の一週間だった。

……初めてじゃなかるうか、こんなに平和だったのは。

その報告の際に馬鹿が発したコメント。

「刮目せよ、これがウチらの本気だ！」

殺意が湧いたので夜まで再起不能にしておいた、筈なのだが、二分後には普通に旅行支度をしてやがる、なんて生き物だアレは。

だが、明日からの温泉に気持ちが浮ついていたのだろう。

俺はまだこの時、いつもなら予想できる筈の事態に頭が回らず、その旅行の日となったのだった。

「準備はいいか野郎共ー！」

『おー！』

「あたしは野郎じゃないぞー！」

「準備はいいか皆の衆ー！」

『おー！』

太陽が眩しい朝っぱら。

デカイ旅行鞆を転がしながら、俺たちは駅前へと向かっていた。これから新幹線に乗って群馬に行き、山奥の山荘に泊まることになる。

向こうに着いたらバスで送迎って流れだ、時間はしっかり守らないと乗り遅れる。つまりだ。

「おい馬鹿共と二人、良く聞きなさい。」

「何さ兄さん。」

「そうだな、特に貴様は良く聴いておけ。今回は時間厳守、さもないと置いていかれる。」

「何で？待たせれば良いじゃんか。」

……メキ、グチャ、ドスツ。

「はい、守らないとこうなります。」

『……………はい。』

「よし、じゃあ行こうか。」

ゴミクズと化した馬鹿を担ぎ上げ、荷物は纏めて引きずっていく。朝のラッシュにもまだ早い、街は閑散としている。俺は心地よい清涼な空気を吸い込むと、いつの間にか隣を歩いている馬鹿に荷物を投げつけた。そりゃもう渾身の力で、奴の巨大な金属製トランクを。ほぼゼロ距離の投擲、鈍い音を立てて吹き飛んでいく。だが良く見ると馬鹿はしっかりトランクを受け止めて、軽やかに着地した。

「なあ、何でお前は生まれてきたの？」

「あつはつは、愚問だよ兄さん。ウチは新世界の神となるためグハア！」

「そうかそうか、まだ眠いのか。さ、寝言ほざく口は早急に閉じようか。あと心臓止めようか。」

「おっけ、今一つ目の心臓止めたわ。」

「俺が存在ごと消してやるわボケエ！」

「カズ君、とりあえず朝だから静かにしようよ。」

「ああ、悪いカオリ。」

「……ぷぷつ、そうだよ兄さん、朝は静かにね、ぷぷつ。」

「早朝から皆さん申し訳ありません、俺は今からこれを壊します。」

「冷静に殺害予告!？」

「はいお兄さん、村正。」

「ありがとう弟くん、これなら静かにあれを葬れるよ。」

「ホカー、俺たちは先に行ってるから。」

「あたしはもう知らないよ、朝からカズ君をおちよくるから死ぬんだよ。」

「ちょ、マジで死亡フラグなのこれ!？」

「日常の些細な判断から死に直面する事もある、勉強になったな馬鹿。」

「いやいやいや、これくらいの光景、高校生とか普通にやってるか

ら死なないから。」

「ふむ……平和だよな日本って。」

「寧ろ常に何処からか武器を取り出す兄さんがおかしい!」

「皆無用心だなあ。」

「そういう問題!？」

「あつはつは、さつきから驚きの連続だね?」

「この化け物!」

「最後に言い残す言葉はあるかな?」

「まだまだ生きてはびこってやるんだ!」

「夢を大きく持つのは素晴らしい、叶わない夢でも少しは素敵だ。

さあ、そろそろ時間も危ない、手短に済まそうか。」

「すかさずダツシュ!」

「待てやコラア!」

「へへーん、馬鹿が見るー!」

「疾く逝ね下朗!」

駅に向かって猛ダツシュ、今なら光の速さで奴を消せるぜ。

さて、走ったお陰で早く駅に着いた。

都会行きの急行に乗って、そこから群馬に向かう。

始発でまだ空いている電車に乗り込み、五人は溜め息を吐いた。

朝から無闇にテンションを上げすぎた、何より無駄に暴れすぎ。

旅が始まって最初の移動で既に刀を抜いた、しかしそのお陰で流石に大人しくなったな。

今は腫れた顔を冷やしながら疲れ切っている、煙草の吸いすぎだなこいつは。

まだこの辺りでは大人しくしていた、弟くんは単に眠いのかテンションが低い、ヒロトは低血圧。

俺は一時の休息を噛み締めるように景色を眺め、ゆったりと背中を椅子に預けた。

まだ都市部には着かないからと、隣では早起きした三人が耐え切れずに寝ている。

今ならと思い、折角なのでカオリとの時間を楽しんだ、幸い周りには誰も乗っていないかつたからな。

電車が駅に近くなると、文字通り三人を叩き起こす。

頭を撫でながら後ろを歩く三人を気にしつつ、乗り換えのローカル線へと乗り込んだ。

手動で開ける扉、小さすぎる車輪、通り過ぎていく人のいない駅。

他に乗客がないことを良いことに、やおら歌いだす馬鹿。

俺は無視して眠ることにした、これからまた疲れそうな予感がしたからだ、保護者って大変。

中途半端な歌声を耳にしながら、少しずつ眠りに落ちていく。

そして馬鹿のシャウト、俺キれる、寝る前に軽く80コンボ。

弟くんがKOのゴングを叩く。

「ふん、クズが図に乗るなよ！」

「ウオオオオオ！ウチはまだまだやれるぜー！」

「ラウンド2、ファイ！」

「宿に着くまで永眠しやがれクソツタレ！」

「血沸き肉踊る！これぞ究・極・奥・技！オラオラオラオラ！」

「ふふん、容易く凌げるわボケエ！見よ！そして食らえ！旋牙連山拳！」

「そんな事より俺の歌を聴けー！」

「またそのパターン！？」

「ホカー、窓から飛び降りてみて。」

「無茶ぶり！？流石に死ぬから！」

「ほら飛べよ化け物、背中を押してやるからよ。」

「ホカゾノー、期待してるよ。」

「飛べ！飛べ！」

「I can't fly.」

「人間やれば出来るさ、さあ、飛んでごらん。」

「じ、じゃあつて無理ー！」

「えー」

「どんだけ死んでほしいの!？」

「馬鹿の飛翔に全米が泣いたら良いなあ。」

「希望!？」

「ホカ、それでも芸人か？」

「五月蠅い黙れ！」

ガヤガヤと街の喧騒にも負けない騒がしさで、俺たちは目的の駅まで喧しかった。

ああ、結局寝れない。

駅に着くと、宿までのシャトルバスが停車していた、急いで駆け込む。

流石に観光シーズンからずれているからか、このバスにもあまり乗客はいなかった。

乗っているのはお婆さま方だけ、一応馬鹿共は黙らせておく、俺たちの五月蠅さじゃお年寄りには辛い。

岩だらけの山道をひたすらに登り、山を越えるとそこから宿まで下っていく。

頂上からの景色は絶景で、珍しく五人で息を飲んで魅入っていた。

遥かなる地平線と、山肌に掛かる雲。

否応なしに自分達が雲の高さにいることを教えてくれる。

緑豊かな山道を下り、山々の間に建てられた宿に辿り着いた。

バスから降り、長い廊下を男性に連れられて歩いていく、ちよつと懐かしい。

昔家族でここに来たな、一度目はまだ祖父も生きていたし、二度目は家族団欒だった、だからこの宿を選んだわけだし。

部屋は二つ。

俺とカオリ、馬鹿三人をそれぞれ分けた、じゃなきゃ絶対寝れない休まらない。

荷物を置いて一休み、茶菓子を食べながら一服する。

「こうして旅行するのは新婚旅行以来か、久し振りですまないな。」

「何か余計なのはいるけどね、子供が。」

「まったくだ、保護者ってのは大変だよ。図体ばかりデカい。」

「昔と変わらなくて良いんじゃない？あだし達はいつまでもこのままだよ。」

「そうかもな、それも悪くない。」

隣では既に騒ぎ始めているらしい、どうやら茶菓子を奪い合っているようだ。

さて、折角だし風呂に行こうか。

俺とカオリはお風呂セットを用意すると、静かに露天風呂に向かった。

長い階段を登って別れる、流石に混浴はないからな。

幸い誰も入っていないかった。

湯船に浸かり、ゆったりと寛ぐ。

「ああ、やっぱり温泉って良いよなあ。」

「しかーし！兄さんに寛ぎの空間などないのだった。」

「果たしてお兄さんに安らぎの瞬間は訪れるのか、次週最終回！そこで彼が見た物とは！」

「薄汚いカスの一物だろうよ、切り落とすぞ雑種。あと死んでくれ。」

「ああ、気持ち良いな温泉。」

躊躇いなく泳ぎだした馬鹿を踏み潰して沈める。

「ほおくら、捕まえてごら〜ん。」

「気持ち悪いもんをぶるんぶるん振り回すな、目障りだ！」

「俺の愚息を気持ち悪いだなんて、酷い！」

「見たくもねえもん見せられたら誰だって同じ反応を示すわボケエ
！」

「あはははは、あはははは。」

「満面の笑みでお湯を飛ばすな、突き落とすぞ！」

「ツンデレ？」

「あはははは、殺すよ？」

「またまた兄さん、素敵な笑顔で言うこと違うっていやあー！」

「引き千切ってやるうかあほんだらー！」

むしり取る勢いで馬鹿に掴み掛かり、巨大な水飛沫が高く跳ね上がる。

それは敷居を越えて女湯にも届いたらしく、低く重い声が向こうから聞こえてきた。

「ホカゾノ〜、後で覚悟しなよ〜？」

「ヤバイ兄さん、真打ちが登場だ。」

「呼び寄せたのは貴様だろうが！」

「カズ君、任せる〜。」

「結局執行人は兄さん！？」

「わ〜い、殺そう！あははははは。」

「わお、福笑いもびっくりな笑顔で凶器振り回してるよ……何処から出したのそれ〜！？」

「キヨシ〜、酒でも飲もうぜ〜。」

「お、流石はヒロト、用意が良いなあ。」

「さっき売店に売ってた地酒。」

「いつの間にも買ったん！？」

「ヒロト、後であたしにも。」

本当に誰も来なくて良かった、これじゃ追い出されてもおかしくない。

二人は酒を飲み交わし、二人は走り回ってる、迷惑極まりないな。さて、それから風呂を出て皆で人生ゲーム、持参はキヨシ、どうやって持ってきたのか、あの鞆は某猫型ロボットのポケットと同じ構造か？

夕食も騒がしかった。

馬鹿が無闇にバイキングだからと張り切って、吐きそうなくらいに山盛りにするからだ。

俺は疲れてダウン、一人で寝始めた。

だが数分もしない内に馬鹿共がやってきて飲み会を始めやがる。

「五月蠅せえぞ貴様らー！やるならテメエらの部屋でやりやがれ、ぶっ殺すぞ！」

「止めてー、この距離は当たるー！」

リボルバーをひとしきり撃ちまくり、漸く床に就いた。

ああ、まさか明日もこんなだろうか。

穏やかな朝日と爽やかな風で目が覚めた。

軽く伸びをして、窓の外を見る。

長く連なる山々と、晴れ渡った青い空。

少しだけ残る眠気がやんわりと抜けていって、俺は朝の緑茶を淹れる。

お湯を沸かしている間にカオリも起床、二人でお茶を飲みながら朝の穏やかな時間を満喫する、幸せな一時だ。

時計を見ると7時を過ぎている、そろそろ馬鹿共を起こしに行くか。俺は朝食のメニューを予想しながら、自分の鞆からシグ・ザウエル P226を二挺取り出した、大学時代から持っている骨董品だ。

……いつまで経ってもこの銃口の向く先は変わらないなあ、成長しろ馬鹿。

弾を装填し、ガスを注入する。

そしてスライドをコッキング、薬室に弾が送られる。

準備完了、さあて朝の軽い運動でもしましょうか。

カオリに敬礼して部屋を出る、目指すは向かいの馬鹿三人。

扉の向こうから、何かが動く気配はない。

鍵は開いている。

静かにノブを回し、気配を殺して部屋に忍び込む。

目の前に敷かれた三つの布団。

一人は掛け布団です巻きにされ、窓際に転がされている、寝相が悪かったんだろうなあ、あれではこの季節蒸れるだろうに、下手すると死んだかも。

しかしそこに残る二人の姿はない、朝風呂に行ったか……或いは。

素早く踏み込み、両手の銃を左右へと向けた。

ガキンツ！

四つの銃口がぶつかり合って、重い金属音を発した。静寂の後、ゆっくりと銃口が下ろされる。

「流石はお兄さん、読まれていたか。」

「ふん、たまには早起きじゃないか二人とも。」

「俺が朝風呂に誘ったら起きてくれたんですよ。そしたら銃を手渡されて、お兄さんが襲撃してくるって。」

「いつもこれくらいちゃんと起きてくれたらな。馬鹿は何故す巻きに？」

「あまりに寝相がウザいのと、夜中最後まで騒いでいたから。」

「ナイスな判断だヒロト、きちんと上下を縛ってるのも高得点だな。さて、朝飯を食べに行こうか。とりあえずその馬鹿を起こそう、各自構えろ。」

ニヤリと笑った三人が、迷わずにトリガーを引いた。

約100発もの弾丸が、気持ち良さそうに寝ている馬鹿に撃ち込まれていく。

ああ、最高。

一発ごとに感情の高まりを感じる、笑いが抑えられない。

濡れる（笑）！！

サディスティックにハイテンションだぜー！

「お兄さんマガジン替え始めたよ、止める気ゼロだよ。」

「ホ力は既に起きてるのに、朝からヒロイさんの狂った笑顔を直視して心閉ざしちゃったよ、一層布団に潜っちゃったよ。」

「これはもうあれだ、カオリさん連れて先に朝飯に行こう。」
「そうするか、ヒロイさん引くほど楽しそうだし。」

二人が静かに銃をしまい部屋から出ていく、しっかり朝食のチケツトを俺の財布から抜くのも忘れない。

遂に高笑いが口から零れだす、もう止まらない。

ちょうどマガジンを替える際に、うるうるとうサギのようにつぶらな瞳で見上げてくる馬鹿。

その瞳はこう訴えていた。

もう止めて、起きたからもう止めて！

さてここで常識問題です。

圧倒的優位な立場の俺が、現在進行形で虐げている馬鹿からの切なる願いを素直に聴いてあげるでしょうか？

言うまでもありませんね、そんなこと天地がひっくり返ってもありえませんが。

寧ろ弱々しく弱者が懇願する姿は、いつそ燃える、嗜虐心に火が点いちゃう。

ああ何でハンドガンだけなんだろう、アサルトとかあれば良いのに。

あれ？

俺は何をしにここに来たんだっけ。

あ、三人を起こしに来たんだ。

我に返って目の前を見る。

布団に閉じこもった馬鹿と、数えきれない弾が床に転がっている、どうやら隠し持っていたマガジンは使いきったらしい。

「ごめん、大丈夫かホカゾノ！」

「……………兄さん嫌い、兄さん怖い。」

「悪かった、テンション上がりすぎた。」

「もうやだ、帰りたい。」

「泣かないで、ウザい……じゃなかった、ダルい、いや違うな。」
「うわあああん。」

ゴッ！

泣き出した馬鹿を黙らせる、再び眠りだす馬鹿、いつも力ずくなのは直した方が良さだろうか。

俺は一度部屋に銃を置きに行き、部屋に散らばった弾やマガジンを集める。

さて、少し遅れたが飯を食べに行こうか。

俺は馬鹿を担ぐと食堂に向かう、軽々と持ち上げられるようになったのは俺の成長の証。

仲居さんとかがギョツとした顔で見えてくるのを笑顔でスルー、明日までに何回かありそうだしこの光景。

食堂に着くと既に二人分もチケットは渡してあった、先を見越して素晴らしいね。

俺が馬鹿を担いできても、ウチの面子は当然のように驚かない、寧ろ見向きもせず食事すら止めない。

空いている席に荷物を放り投げ、淀みない動作でそのままバイキング形式の朝食を取りに行く。

俺は和風に固めた朝食を二人分、自分と馬鹿の席に持っていき食べ始める。

「この後ゆっくりしたら出掛けてみるか？石段街とか吹割の滝とか見に行こう、麓の駅までは送ってくれるらしいから。」

「ちゃんと調べてる辺りがカズ君らしいね、流石だよ。」

「流石はお兄さん、俺たちを楽しませることを考えてくれてるね。」

「ふうん、面白そうだな。」

「ちょっと忙しいかも知れないが、折角遠くに来たんだから見てお

きたいだろう？」

「あ、朝飯が既にあるわ。いただきます。」

唐突に飯を貪りだした馬鹿を一瞥、すぐにスルー、淋しさでまた泣きそうな顔をしてる。

それすらも華麗にスルーして、今日の予定をまとめる、馬鹿は会話にすら入れない。

理不尽な扱いにいじめてテーブルに伏せる、遂にむせび泣く、この上なくウザい、とりあえずブツ叩く、まさかずっとこのテンションだろうか。

俺たちは食器を片付け、食堂を後にした。

ホカゾノは構ってもらえないからか諦め、黙って後ろから付いてくる、静かだといっそ薄気味悪い、あと無意味に罵倒したい。

よく考えるとこの扱い、某三姉妹漫画の内田の扱いに似ている。

さて静かなホカゾノを無視しつつ、俺たちは旅館が用意してくれたバスに乗り込んだ。

昨日も見えた景色に再び感動し、俺はそんな三人を持ってきたデジカメで撮影する、ホカゾノは寝ている、当然そんな絵に容量の無駄遣いはしない。

バスは1時間程で駅前に到着した、次にここへ来るのは17時くらいになるからそれまでに戻らなければならない、携帯で逐一電車の運行表を確かめないといけないな。

まずはここから沼田駅に向かう、吹割の滝が最初の目的地だ。

それぞれ切符を購入し、ホームで電車を待つ。

ふと周りを見回すと、馬鹿が姿を消していた。

黙って静かだからと放置したのは失敗だったかと嘆いていると、いつの間にか隣に立っていた、手には木の箱を持っている。

「何だそれは？」
「こつという寂れた感じの駅に来たら駅弁っしょ！」
「お、お前今年に入って初めて良いこと言ったか？」
「ふふん、ウチは今朝から溜めた力を発揮しはじめたのさ。」
「よし、余計なことはせず黙って食べていてくれ。それと、ゴミはきちんとゴミ箱にな。」
「仕方ないなあ、吹割の滝までは大人しくしてるよ。」
「未来永劫喋るな。」
「そんなこと言って、兄さんボケがいないと寂しいくせに。」
「くたばれアホがあー！」

脇腹に喧嘩キツク、不様にも倒れる馬鹿。

「弁当を零さなかったのだけは誉めてやる。」
「蹴りつつ誉める、新しいツンデレを開発したね兄さん！」
「お前はそんなに首と胸が泣き別れたいのか？」
「いやいや兄さん、自分をもっと曝け出そうよ！」
「お前みたいにみつともなく曝したくはないがな。」

弁当をもりもり食べる馬鹿を引っ張って、入ってきた電車に乗り込む。

やはりシーズンを外して正解だったな、殆ど電車は空席だ。
お陰でゆっくりと景色を楽しむことが出来る、旅とはやはり良いものだな。

……吊り革で懸垂を始める馬鹿さえいなけりや言うことないのにさ。
もうかつたりい、無視だな。

「ヴェルファイアー！」

「……………」

「あたしもやってみよ！」

「馬鹿には負けないぜ！」

『ヴェルフアイアー！』

「……………」

「さあ、後は兄さんだけだよ。」

「ヴェルフアイアー！」

『ヴェルフアイアー！』

「は〜い、後ろの5人組のお客様〜。壊れるから吊り革で懸垂をするの止めてね〜。」

『すみませんでしたー！』

大人しく座席に座って景色鑑賞、調子に乗るとすぐこれだ。

吹割の滝に着くまでは流石にみんな大人しくしていた、まあかなり恥ずかしかったからな、嫌な汗がびっしょりだよ。けどこの光景を前にしたら黙っていられないな。

「凄いな。」

「迫力あるね。」

「岩の割れ目に滝が流れていくのか、へえ〜。」

「滝が割れ目に……………割れ目から滝が……………」

「割れ目にイン！」

「はい黙ろうかそこの欲求不満のクソツタレ共！」

「あれ〜？兄さん何を勝手に想像してるの〜？」

「お兄さん、それはあきません。」

「滝の藻屑となりやがれー！」

ひとしきり馬鹿共を追い掛け回し、結構な勢いでどつきまわす。

土産が見たいと言うので、そろそろと入り口付近の土産屋に行く。

土産屋さんで昼食を買って、滝を見ながら食事を済ました。

次に向かうのは石段街、距離があるから早めに出ないと間に合わないだろう。

電車に乗り、渋谷駅に向かう、俺的に見たい本命はこっちだからな。また人の少ない電車に揺られて田舎町を抜けていく。

流石にここではヴェルファイアはやらない、また怒られたらたまらない。

さて、どんな景色を俺に見せてくれるかな。

岩の階段、その左右に立ち並ぶ繁華街。

400年の年月を重ねたその街は、今まで行った中で一番活気に溢れていた。

様々な店があり、そのどれもが個性的だ。

こういった場所は自然楽しくなってくる、土産屋とかは特に楽しい。昼食を食べたばかりだが、ちよつと何か食べていこうかな。

あの利休庵とか気になる、少ししか居られないが、出来れば存分に堪能したい。

だが、しかしだ。

子守を放棄する訳にはいかないのだった。

カオリとヒロトは問題ない、特に厄介事を持ち込まないからだ。

だがあれは何だ。

キヨシは既に探索に向かったらしい、早急に捜し出して説教せねば。ホカゾノは何処からか調達した伊香保焼きを貪っている、何で今日は無駄に食いしん坊なんだこいつ。

最後の一つをひよいと奪い取り、啞然とするホカゾノを放置して二人に話します。

「とりあえずここでは自由にしよう、猶予は一時間ってところかな。それまでに駅前集合だ、遅れないように。」

「さもないと宿に帰れないって事だね。」

「じゃあ俺はホ力を見張るんで、行くぞホ力。」

「うい〜。」

「あんま調子乗ってはしゃぐなよ?」

「うきやあああああ！」

ゴッ！

「言ったそばから奇声を上げんな、嫌がらせかテメエ！」

「あつはつは、やだな兄さん……嫌がらせに決まってるじゃないか！」

ゴガッ！メキッ！

「良い笑顔だったね。」

「僕らが最後に見たのは、彼の最高の笑顔でした。」

「勝手に殺すな！」

「まだ生きてんのかテメエ！」

「いやああああ！」

「ここはカズ君に任せて、あたし達はキヨシ君を探しに行こうか。」

「そうですね、こいつはヒロイさんしか物理的に止められないし……警察呼ばれそうな勢いで殴ってるけど。」

さあてこの馬鹿を機能停止させたらカフェに行くぞ、きっと勉強になるし。

「そうと決まれば早速行こうか兄さん。」

「どうして、お前は、何度殺しても、死なない！」

「いやいや兄さん、愚問だよ、そして今更。」

溜め息しか出ない、誰か聖剣持ってきて。

とりあえず二人で細い路地を登っていく。

その先にある茶房でまりに入る、クラシカルな雰囲気な素敵な喫茶店だ。

俺は珈琲を注文して、店の家具などを見回す。

雰囲気はウチの店に近い、やっぱり喫茶店は落ち着ける方が良いな。

「兄さん、このお店刀とか銃が置いてないよ。」

「……はあ、当たり前だろ馬鹿。あんなのが壁に掛けてある店はウチくらいなもんだ、原因は貴様だがな。」

「無用心だねえ。」

「別に用心で置いてるわけじゃないがな。大体俺とお前が居れば大抵の相手には余裕だろ？」

「そうさ、ウチらにはブブさんがついてる！」

「喧しいぞ化け物、魔界に送り込んでやるうか！」

「すぐに制圧しちゃうよ？」

「当たり前のように魔王昇進か……。」

そんな下らない話をしていると、二人分の珈琲が運ばれてくる。

やっぱり珈琲の匂いを嗅ぐと落ち着くな、働いてる気分にもなるけど流石に馬鹿にも風情を楽しむ心はあるらしい、大人しく珈琲を飲んでいる。

珍しく、本当に珍しく、俺たちは何事もなくカフェを出た。

さて、後は利休庵つてのに行こうかな、小腹も空いていることだし。

「おい馬鹿、お前あれだけ食べてまだ腹に入るか？」

後ろに問い掛けてみる。

返事がない。

はあ。

振り替えると遙か後方から走ってくる馬鹿、その手には伊香保焼きが乗っている。

「訊くまでもなかったか……。」

「いやあ、これ美味くてさ。で、何か言った兄さん？」

「何でもねえよ、黙って付いてこい。」

「兄さんの背中って……大きいね。」

「伊香保焼き鼻の穴に突っ込むぞ貴様。」

「いやいや、褒めたただけだって。で、何処に行くの？」

「利休庵って甘味処だ、何か美味そうなものもありそうだろう？」

「甘味かあ、ならまだ食える。ウチも行くわ。」

「よし、店まで競争！」

「え！？」

唐突にダツシュ、きよとんとしたホカゾノ。

華麗なるスタート、決してズルくはないんだよ。

多分奴も判っている筈だ、何しろ必死に走ってくるもの。

負けた方が奢りだろうなあ。

大切な旅行のお小遣い、最後に買う自分へのお土産代として出来る限り残しておきたい。

そして、こういった観光地の飯は美味いが高い、下手すると不味い。そんな半分博打の飲食行為に1000円以上は掛けたくない。

出来るならハイエナのように他人が買った物を少しでも買っただけ貰うのが好ましい、不味くても食べきる義務はないし、美味かったら買いに行けば良いから。

「負けるかー！」

「マジ最低！兄さん汚い！」

「ふははははは、最っ高の誉め言葉だぜ！ざまあみる、負け犬の遠吠えを聴ける時は近いぜー！」

「鬼！鬼畜！悪魔！魔王！狂人！殺戮者！冷酷！サディスト！」

「言わせておけばー！」

ぶん殴ろうと振り返った瞬間、少し落ちた速度を嘲笑いながら馬鹿が並んだ。

「あつはつは、罵倒されるのに慣れてない兄さんなら怒ると思つたぜ！サラバだのろまな亀さん、ゆっくり追い付いてくるよろし。」

「逃がすかよウサギちゃんめ、狼から逃げられると思つたら大間違いだ！」

「兄さんは夜の狼さんでしょ、ぷぷ〜！」

「おのれ貴様、拷問という名の説教をしてやるわー！」

しかし走りながら会話するのは当然ながら体力を使う、そして二人して煙草に蝕まれた肺では長く走れるわけがない。

店に着く直前で急激減速、倒れるように膝について汗をたらたら流しまくる。

「どっちが勝ちだ？」

「同時だったでしょ！」

「なら奢りはなしだな。」

「始めから走らなきゃ良いのに……。」

「同感だが、俺たちはいつもだろう。」

「昔からだからね。」

息を整えて、漸く店に入る。

途端に甘い匂いが鼻腔を抜ける、幸せな匂いだなこれは。あてがわれた席に座ると、二人でメニューを眺める。

「抹茶とか良いな。」

「みつまめって美味そう、ウチはこっち。」

店員に注文をすると、冷たいお茶が運ばれてくる。そして結構早く注文が届いた、まあ客の少ない時間だからな。珈琲の後でも抹茶は美味しい、和風ってのはやはり素晴らしい。ほろ苦さと香りが舌に心地の良い風味を残していく、ウチも抹茶ラテとか始めようかな。

「おかわりー！」

「お前それ何種類目？」

「あと一つで甘味完全制覇！」

「胃もたれしそうな光景だな。」

「兄さん、一応ウチも無意味に食べてる訳じゃない。これは研究開発なのさ、新しいウチの店の商品をね。」

「で？ならウチの料理長の感想をお聞かせ願おうか。」

「これマジ普通に超ウメエ！」

「……死んだほうが良いなお前。」

かなり引いた表情の店員に見送られ、俺たちは店を出た、そろそろ駅に行かないとな。

二人で駅に向かってしていると、既に駅前には三人が待っていた、珍しく普通に大人しい。

「悪い、待たせたな。」

「いやあ兄さんが駄々をこねるから遅れちまったって痛い。」

「下らない嘘を吐くな。」

「宿に帰ったら温泉だな、そしたら卓球でしょ！」

「温泉旅行には不可欠な要素だな、その案は採用。」

「あたしも負けないよ！」

「ウチもどんな手段を使っても勝つぜ！」

「や、手段は選ぼうか。」

再び電車を乗り継いで宿の最寄り駅に帰ってきた、物凄く五月蠅い二人を黙らせるのに苦労したが。

待つていてくれたバスに乗り込み、暫く山道の揺れに身を預ける。ふと見ると、特に五月蠅い二人は疲れて眠っていた、夜のための体力を回復しているのだろうか。

宿に着くとすぐに夕食だった。

直前まであれだけ食べていたホカゾノが一番食べているのが恐ろしい、いっそ清々しいくらいの食べっぷりだが。

さて、風呂でゆっくりと汗を流す。

残暑の中であれだけ走ったりしたからな、結構ベタベタしている。

馬鹿が二人で騒いでいるが、他人のふりを決め込もう、何食わぬ顔でスルーしよう。

ヒロトと二人、黙々と体を洗っている。

後ろからいつきまーすとか聞こえる、飛び込みは危ない、とにかく迷惑。

でも止めたら知り合いだとばれる、そしたら周りからのあの冷たい視線を浴びることになる、心が挫けそうだ。

「キヨシ、兄さんはとことんシカトするつもりみたいだぞ。」

「兄弟なのに冷たいなあ、おーいお兄さん、一緒に遊ぼう！」

呼ぶな馬鹿野郎、良い歳した奴が下半身も隠さずはしゃぐな。

「駄目だ、お兄さんシカトするわ。きつと関係者つてばれたくないんだな。」

「ならこうすれば流石に……その髪の毛短い兄さん、もう諦めなよ、既に冷たい視線を向けられてる事実から目を背けちゃダメだよ、周りにいる困っている人を助けられないのが兄さんの騎士道なの？」

「上等だテメエ！今すぐに貴様の息の根止めて、他のお客様に全力で謝罪する所存ですよ！」

一瞬で奴の背後に回り、全力の回し蹴りをお見舞いする。首筋に足を引つ掛け、勢いよく温泉の底に叩きつけた。

気絶して浮かんでくる馬鹿野郎、傍で怯えるド阿呆。

直後拍手喝采、と同時に俺謝罪。

早急に馬鹿を担ぎ上げ、怯えるド阿呆はヒロトに任せて風呂を出る。馬鹿を蹴り起こすと、風呂での記憶が飛んでいた、この技を覚えたら楽だな。

そのまま待つていたカオリを連れて卓球室へ、フロントでラケットと球を借りていく。

「へいへい！兄さん、ビビリじゃないならラケット握りな！」

「はっ！あんま調子乗ってんじゃねえよ、怯え隠しの虚勢にしか見えねえぞ！」

「ふん、ウチが敗けるなどありえないね！兄さんが不様にも敗者として跪くのを高笑いして見てやるぜ！」

「テメエのその自信、欠片も残らないくらい完膚なきまでに粉々に打ち砕いてやる、覚悟しろよ雑種！」

もうお互いに不様だった、とにかく力押しししかないのだ。

俺もアイツも、要は無駄に格好つけて打とうとした。

強引すぎるスマッシュはネットに突撃し、無駄に力を込めたスピンは相手コートに入る前に落ちるし、最終的にはお互いの顔を狙い始めてそりゃもうカオス。

続いて二回戦。

ヒロトとカオリが物凄く静かに、だけどお互い一步も勝ちを譲らず、意外に見応えのある試合になっていた。

そして三回戦。

「キヨシなんぞに敗れるかよ、すぐにお兄さんと泣き付くだろう

よ。」

「ろくに試合も出来ない奴がよく言うぜ、吠え面かくのはテメエだよ。弱い奴ほどよく喚くって言うだろ馬鹿め！」

ひたすらに罵倒しあつ、一向に試合は始まらない、さっき俺もこんなだったか……。

まあ漸く始まった試合は面白かった、変な必殺技まで飛び出していたからな。

遊び疲れて部屋に戻ると、三人は静かに素早く寝てしまった。

俺はもう一度温泉に入り、初めてゆつくりと体を休める。

疲れが溶けだしていくみたいに、少し熱いお湯は俺を包んでくれた。空を見上げると、満天の星空が広がっている。

幻想的な美しさに、暫し俺は見惚れていた。

さあ、明日家に帰るまでしっかりしなくちゃな。

部屋に戻り、静かに眠る。

また明日も無事に。

「おはよう兄さん、今日もいい天気だよ。」

「何だ？朝っぱらから凄絶な笑顔で気持ち悪い挨拶しやがって、呪いの儀式でもするつもりか？」

「酷い、普通に起こしたただけなのに。」

「退け馬鹿野郎、貴様ではお兄さんに至高の目覚めを提供することは出来ぬ。」

「ならばやってみせよ！兄さんに笑顔を取り戻せ！」

「任せろ！……べ、別にお兄さんを起こしに来たんじゃないんだからね！」

「うわあ、ウゼエ。」

「辛辣な台詞をなんて爽やかな笑顔で！？」

「見る！お兄さんのこの笑顔を！」

「お前はこれで良いのか！？」

「構わぬ！我、願い成就せり！」

「うるせえぞクス共！とつとと消え失せろ！」

布団ごしに二人を蹴り飛ばし起床、時計を見るとまだ6時、珍しく早起きだなこいつら。

軽く体を動かしてほぐす、いつでも万全な状態じゃないと一撃で奴を気絶させられない。

カオリが着替えるからと部屋から追い出し、奴らの部屋に入る。

布団はぐちゃぐちゃ、茶菓子のゴミはテーブルに散らばっていて、荷物も片付いてない。

「10時にはチェックアウトなんだからな、それまでに荷物を纏めておけよ。温泉に入るのは自由だが、まずは部屋を出ないといけな

いんだ。」

「ほらホカ、早くしろよ。」

「お前もな！」

「布団とかもカバーとか外して分けておけよ、マナーだからな。」

「ほらホカ、早くやれよ。」

「だからお前もな！」

「ヒロト様のご命令に逆らうのか貴様！」

「キヨシ〜？ウチも暴力を振るうんだぞ？」

「テメエらはいちいちボケないと死ぬ生き物なんか？」

『そうさ！』

「朝から疲れる。」

「そんなんじゃ家に着くまで保たないぞ兄さん。」

「うるさいよ！いいからさっさと片付けろ！」

「ほらホカ、ヒロイさんの言う通りだぞ。」

「お前もだよって、あれ？いつの間にか終わってる！？」

「ホカゾノ遅いぞ！お兄さんが降臨されたし瞬間より片付け及び隠蔽工作するくらいの気概を見せよ！」

「弟くん、隠蔽工作って何の事かなあ？」

「後にして下さいお兄さん！今こいつに大事な話をしてるんです！」

「勢いで頷くと思ったか馬鹿めが、何を隠した！」

「何も隠してないツス、俺は潔癖ツス。」

「隠しても仕方なくない？すいませんヒロイさん、その二人がヒロイさんの刀を二本、初日の夜に酔った勢いでチャンバラやって折りました。」

『ヒロトー！？』

「ほお、そりゃ面白い話だな。」

「違うんだよ兄さん、話を聞いて！」

「お兄さん聞いて下さい、悪いのはこいつです！」

「あ、テメエ！お前だって兄さんの刀を持ってきただろ！」

「最初に折ったのはお前だろ！」

「そのあとですぐにキヨシも折ったじゃん！」

……… 凄くウザイ、筆舌に尽くしがたいくらいウザイ。

判るだろうか、この幼稚園に通う児童の如く下らない責任転嫁。

いや、彼らも薄々気付いているんだろ。

どうせ二人とも俺に殺されることくらい、いつものことだしな。

でも出来る限りの言い訳をしないとねえ、もしかしたら片方は生き残れるかもだなんて、夢魔だって拒否るくらい甘い夢を見てるんだ。ならさ、俺の役目ってこれしかないよね。

夢から覚めてもらいましょう。

断末魔さえ叫べないくらい、瞬殺しました。

ヒロトが無意識に一歩たじろぐような光景だね、だって俺が無言だもの。

無表情で無言、それでも濃密な殺意と絶え間なく殴り続ける光景は、きつとどうしようもなく不気味だ。

所変わってフロント前10時。

すっかり別人の顔になった二人は近くのソファで落ち込んでいる、誰も慰めない。

俺は部屋の鍵を返し、もう一度風呂に入りたい旨を伝えると、快く承諾してくれた。

荷物はフロントに預け、風呂セットを持って露天風呂に向かう。

ああ、明日からまた仕事か。

そう思うと、少しだけ寂しくなる。

なら風呂はゆっくり浸かって、一辺も残さず疲れを落としていこう。

「ダイナミックストロークエントリー！」

「アスカー！」

「……………」

「盗んだバイクで走りだす〜」

「家の風呂じゃ潜れないから、ここで潜るの。」

「アスカチャンス！」

ああそうか、この疲れは無くならないんだ。

だって常にこうして蓄積するんだもの、終わりが見えないわ。

旅の恥は書き捨てて言うけれど、この馬鹿共はホントに……………ホントに。

ヒロトまで楽しそうに歌ってる、相変わらずいい声だけど、ここでは歌うな！

そして毎回のようによくもまあ下らないボケを思いつくね君ら、ちよっと尊敬するよクソ馬鹿。

もうあれだ、ここにいちやダメだ。

俺は体を綺麗にしてから、そつと移動して露天風呂へ。

ガラス越しに中で騒ぐ三人を放置して、俺は現実逃避気味に空を見上げた。

……………あ、飛行機雲。

「兄さん、なに黄昏てるのさ。」

「空が蒼いなあ。」

「おやおや、お兄さんはアンニユイですか？」

「お前らが騒ぐからだろ。」

ヒロトくん、君もです。

「そんな時は歌だよお兄さん。」

「さあ、翼をくださいいってみよー！」

「今、私の〜」

歌いだした、俺の安息は消えた。

でも懐かしいな、中学の頃に歌ったな。

でもこの曲で。

「この広い〜 この広い〜」

歌いながら三人が俺を見てくる、そうそうこんな感じでよく見られてて、見た奴ら潰してたなあ。

「いやああああ！」

「ホカゾノ逃げてー！」

「ヒロイさんが魔王の顔をしてる。」

「ふはははははは！滅び去れ、愚鈍下劣なるゴミ共め！」

もう決めた、かったりいから殺す。

みんな壊れちゃえば良いんだ！

「ヤバイよキヨシ、兄さんが覚醒した！」

「全てはゼーレのシナリオ通りに。」

「ヒロト黙れ。」

「ウオオオオオオ！」

「これが……初号機。」

「いやいや壊れた兄さんだから！」

「誰か、ロンギヌス持ってきて〜！」

「ボクはカラル、渚カラル。でもロンギヌスは置いてきた。」

「マジ帰れ！」

「八つ裂きパーティー！」

「パトラッシュ、もう疲れたよ。」

「休んじゃえ。」

「ヒロトー、キヨシを第一の犠牲者にするつもりか！」

「その声は…ゴミ！」

「覚醒しても尚その認識!？」

「こうなつてはもう、誰にも止められないんじゃ。」

「ふざける余裕があるなら止める方法考えろ！」

「お前！いきなりナウシカかよ！って突っ込めよ！」

「判るか！」

「ええー、一般常識だよ。」

「やつてる場合か。」

「考えたんだが、もう誰かが犠牲にならないと止まらないのでは？」

「珍しく真面目に考えてるのねヒロトさん、わたくしもそう思いますわ。」

「おほほほほほ。」

「壊れちゃった!？」

「じゃあ俺達先に上がるわ。」

「敵前逃亡だと!？」

「馬鹿め、あれが敵だと？あれは魔王、勇者じゃない俺達じゃ勝てない。君にしか出来ない、やれるわね？」

「無理だから、塵にされるから！」

「エクスカリバー！」

「魔王なんてもの取り出すの!？」

甘美な悲鳴が聞こえて、俺は漸く目の前の惨劇に目を向けた。

風呂のお湯は大分減り、その中心には体育座りで泣きべそをかいて
いる馬鹿。

ヒロトと弟くんは既に退避したらしく、風呂場に残るのは怯えて端
つこに蹲る一般客の方々。

ううん、俺は何かやらかしたらしい、何故か家に置いてきた筈のエクスカリバーを握ってるし。

とりあえずお客さんに謝罪、物凄く怯えていて中々話が通じなかったけど、ちよつと肩に手を置いたら必死に謝ってきた、とても優しい方だ。

さて、そろそろ帰り支度をしなきゃな。

「いやいや兄さん、ナチュラルスルーはダメ、絶対。」

「チツ、独りになりたいかと気を遣ってやったんだがな。」

「なら舌打ちとかしないで。てかこれだけの惨劇を起こしといてなに現実逃避してんの？」

「嘘だ！」

「ひぐらし出ちゃうくらい混乱してるんだね、判るよその気持ち。」

ウチもよく兄さん怒らせると後悔するし。反省はしないけど。」

「うわああああ！」

「何で剣を抜いた！？ちょ、落ち着いて兄さん！」

「もうこの宿ごと消し去ってやるー、犯罪に満ちたこの想い出と共にー！」

「犯罪って判ってるなら止めてー！」

.....。

もう後の事は覚えていない、気が付いたら家のリビングに居たのだ。なんでもあの後、俺は唐突に意識を落としたりしい、自分の精神を守る自衛行動だったのだろう。

ホカゾノはひとまず完全にキマッてしまったお客さん達を宥め、逃げた二人を呼び戻し撤収したとのこと。

カオリは帰り方を覚えていて、ホカゾノはぐったりした俺を抱え、ヒロトとキヨシは俺達の荷物を持ったらしい。

目を覚ましてから言った一言。

「や、ご苦労。」

殴られた、ヒロトさえ金属バット持ち出したくらいだし。袋叩きつてああいうのなのか、いやあ死ぬよあれは。

罰として1週間のパシリを任命された、そりゃもう馬車馬の方がまだ楽してると思うね。

だが1週間経つてみて気が付いたんだ。

原因って俺じゃなくね？

長閑な朝の陽射しを浴びながら、俺は店のドアを開けた。ふわりと漂ってくる珈琲の匂い。

誰よりも早く来る俺だけの特権だ。

店内に入ると、まずは窓を開けていく。

爽やかな風が入り込んできて、籠った空気を押し出してくれる。

換気を終わると、次は調度品の掃除。

朝と夜、毎日欠かさず綺麗にする。

テーブルを濡れた布巾で拭き、椅子の位置を整える、見た目から綺麗にしておきたいからな。

客席が終われば、そのままカウンターの内側へ。

前日に片付けた調理器具を並べなおして、倉庫から豆や葉を取ってくる。

湯を沸かしながら各機材のチェック、急に点かなかつたら困るからね。

沸いた湯を使つて最初の珈琲を淹れる、うん、今日もいい感じだ。

開店準備も済んだところで、俺は淹れ立ての珈琲を飲みながら一服する。

紫煙がゆらゆらと漂う様を見ながら、俺は後から出勤してくる仲間を待つ。

起業して、この店を共にオープンさせた大切な仲間：なのだが。

「チツ、また寝坊してやがるなあいつらは。」

流石にそろそろ起きてもいい時間帯だ、そもそも9時から来ている俺でさえ割とゆっくりとした時間配分だろう。

と、そう思った矢先。

ドアに付けられたベルを鳴らしながら、4人の待ち人が入って来た。

眠たそうな顔が三つ、呆れ顔が一つ。
まったく、あれほど夜更かしはするなと言っておいたはずなんだがな。

「おいド阿呆ども、とつとと起きねえと今日のランチメニューに加えんぞコラ。」

「……どうして朝はまたやってきてしまうん？」

寝惚け面かました弟に渾身の回し蹴りをお見舞いする。

その勢いでテーブルの角に頭をぶつけると、声にならない呻きを上げてのた打ち回った、流石にこれで目覚めただろう。

暫くそれを眺めていると、突如起き上がり、天井に向かって唸り始めた。

「うおおおおおおおおおおおおおおん！」

「まさか…暴走!？」

そのままの勢いで更衣室へと走っていく、チィ、馬鹿を一人取り逃した。

そして振り返る。

すでに一人は目覚めの一服を始めている、ああ、俺の珈琲まで…。
残った一人、図体だけ無駄にデカイ馬鹿はいまだ夢の中に居るようで、ふわふわとおぼつかない足元のまま更衣室に向かって歩き出す。
ふむ。

俺は迷わず、手にしていた煙草をその阿呆に押し当てた。

一瞬の空白。

「って熱い!? ちよ、酷っ! 兄さん、いくらなんでも酷くない?？」

「おお目覚めたか木偶の坊、とりあえずその薄汚い面に熱湯ぶっ掛けてしゃきっとしなさい。」

「火傷だよねえ！？確実にそれ火傷確定だよね！」

「ぎゃあぎゃああと朝っぱらから五月蠅い奴だな、だったらしっかりと睡眠とって働きにきやがれ。」

ぶつぶつと文句を言いながらカウンターで火傷を冷やし始める。

それを一瞥し、唯一しっかりと起きているらしい一人に話しかけた。

「すまないなカオリ、馬鹿が三人も居ると起こすのに手間取ったろ？」

「もう慣れたし、最近は物理的手段で叩き起こすから。」

「それは頼もしいことだ。じゃあカオリはレジのチェックを頼む、俺は店の前を掃除してくるから。」

慣れた手つきで香織はレジへと向かい、俺は掃除用具入れから箒を取り出し店の外へ。

通勤や通学のラッシュを終えた商店街は、とても静かで寂れた雰囲気がある。

まあ何処の店もシャッターを閉めていれば当然なのだが、皆中で開店準備をしているのだから仕方がない。

俺は細かい砂埃を箒で掃き取り、舞い上がらないように水を撒き始める。

すると幾つかの店舗もシャッターを開け始め、少しずつ活気が満ちてきた。

もう30分もすれば朝市を目指した逞しい主婦の方々が、家の諸事を終え、買い物袋を携えて闊歩し始めることだろう。

何人か商店街の人々が挨拶をしてくれたり、今日も頑張ろうと応援してくれたりする。

うん、この雰囲気は俺はとても好きだ、夢見ていた景色そのものと言えるね。

俺は掃除を済ませ、お隣の店舗のご主人に挨拶を終えると、晴れや

かな気分で店内に戻った。

まあそこで気分は一変するが。

まず、先ほど俺の珈琲を奪い取って一服をしていた男、ヒロトがテーブルに突っ伏して寝ている。

次は俺に煙草を押し当てられたアホ、ホカゾノがウザってえテンションで珈琲を淹れる練習をしている。

……まあこれは別に間違っていない、単に鬱陶しいだけだ。

そして更衣室に暴走しながら走っていった弟、キヨシが珈琲を待ち望む客のようにカウンターで煙草を吸っている。

カオリは既にレジの起動を済ませ、更衣室に向かったようだ。

俺はベストの内側に忍ばせていたガスガンを取り出すと、その三人に容赦のないマガジン掃射を決めた。

むくりと起き上がるヒロト、大丈夫、ヒロトは起きれば働いてくれる、単に低血圧な所為で朝が驚異的に弱いだけだ。

次に弟くんへと狙いを定める、既に逃げ始めている辺りは慣れている。

「まあ逃げるなよ弟くん、逃げたって結局は同じなんだぜ？」

「いやだって仕事はもう済んだし、珈琲くらいは良いでしょ!？」

「その仕事とはいったい何だ？」

「あ……着替えるでしょ、店を見て回るでしょ、今日も兄さんはきちんと仕事をしているなって感心するでしょ……俺は今日も頑張ろう！」

「そうかそうか、そんなに閻魔様と珈琲を飲みたいか。」

迷わずに撃ち続ける、悲鳴が木霊する。

ガシヤッ!

チツ、弾が切れた。

俺は新しいマガジンをリロードすると、既に見える範囲から消えているド阿呆を探しに出かける。

弾薬を薬室に装填し、猫なで声で声を掛ける。

「トシユキくん、馬鹿だから拷問DEATH!」

「何で!??てかウチは特に悪いことしてないじゃん!」

「おやおやく?そつちから声がしたなあ。」

俺は最高にハッピーな笑顔で靴音を響かせながら、ゆっくりと裏手の倉庫へと足を向ける。

中で恐怖に慄く馬鹿の顔を想像すると、今日も一日頑張ろうって気分になるね、ゾクゾクシチャウ。

扉をゆっくりと開けると、中にはこちらに引きつった笑みを向けるカスが一匹。

「さあ、楽しい殺戮シヨーと洒落こもつか。」

「いやいやいや!だから何故ウチに撃つのか!」

「うん………ただの気分かな、一日の始めに精神のハリを取り戻さないとき。」

「めっちゃとばっちり!」

「まあそついうことだから、おとなしく死んでくれや。」

何か言おうとするのすら遮るように、俺は幸せいっぱいな笑い声と共に銃口を馬鹿へと向けた。

こうして俺たちの店、フラトレスは開店する。

「全員整列！」

ザツ！

「これから各自の任務を言い渡す！心して聞け！」

『Sir・yes sir!』

「ホカゾノ！」

「はい！」

「お前は俺と一緒に料理や飲み物の準備だ、日頃の成果を遺憾なく発揮せよ！」

「了解！」

「キヨシとヒロト！」

『はい！』

「お前たちは店内の清掃及び装飾を担当してもらっ、センスの見せ所だ、期待するぞ！」

「お任せ下さい隊長！ヒロトを上手く使います！」

「テメエもやれよ！」

「俺はしっかりキヨシの手綱を握って上手く使います。」

「譲り合いの精神が素敵！凄く不安になってきた！……では各自の健闘を祈る、解散！」

「よし、二度寝だな。」

「俺はスロット打ちに行こう。」

「俺はゲームでもしようかな。」

「おい！何でソッコーサボろうとしてんのお前ら！？」

「だって解散って言ったじゃん。」

「違うわボケ！作業に取り掛かれて意味だよ！」

「なら最初からそう言えば良いじゃん、回りくどいよお兄さん。」
「確かにちよつと軍隊仕様でテンション上がったよ、悪かったよ！」
「やれやれ兄さんはこれだから、実は一番ぶざけてるよね、こっちは真剣なのに。」
「悪かったスミマセンもうしませんごめんなさい！」
「あれ？謝り方が足りないんじゃない？こっちは随分とモチベーション下がったけど。」

……ウザい、やっちまいたい。

でも今人数を減らすのは得策ではない、もう昼を過ぎている。

「つかそもそもお前らが揃いも揃って寝坊したからこんなに急いでんだろっが！」

「仕方ないさ、僕らは目覚ましに嫌われた悲しい子。」

「妖精さんにも見放され、昼まで目覚められない悲しい子。」

「あの酒は美味かったなと余韻に浸る悲しい子。」

『ヒロトー！何ばらしてんのー！？』

「結局テメエらが原因じゃねえか！」

「兄さん、悪いのはヒロトです！」

「あんな美味しい酒を不敵な笑みで出すのが悪いんだ！」

「ヒロイさん、こいつら俺より先に封を開けるんですよ。」

「何て計画性のない馬鹿なお前ら……。」

学習できないのか、もうダメダメ。

「もういい、とつとと作業を始めろ。」

「ならキヨシ、色紙とか買いに行こうぜ。」

「任せろ、荷物は持つぜ。」

「ならウチは仕込んでおいた鶏肉とか味見しないと。」

「節操なく色々用意したからな、味とか不安だ。さ、始めるか馬鹿。」

二人ともカウンターに掛けてあるエプロンを着けると、厨房に入る。すると何故か俺たちより先に、本日の主賓であるカオリが待ち構えていた、既にエプロンも装着済みだ。

「あれ？何でカオリさんがここに居るの？」

「いちゃ悪いの？」

「いや全然いいツスけど。」

「カオリ、部屋で待つんじゃないのか？」

「上達したあたしの腕前を見せにきた。」

「ほほう、では期待させてもらおう。自分の誕生日の料理を自分で作るつても面白いが……因みに何を作るんだ？」

「炒飯！」

「……………」

「兄さん！黙ったら駄目だよ！」

「炒飯だと、凄じじゃないか！」

「なんか反応が微妙じゃない？」

「ウチも料理しないと！」

「さて、俺は白身のカルパッチョでも作るか。」

「ちよつと二人ともこつちを見なさい！」

いやいや、俺たちの作る物の中に炒飯って…………シユール通り越して恐怖だよ、何かの罰ゲームかと思うわ。

洋風の料理が殆どの中で唯一の中華、もう畏にしか見えない。

結構カオリが練習してるのは知ってたが、まさかまだ炒飯の段階だったとは。

当のカオリさんは早速卵を割っている、しかも10個ほど、全員もれなく炒飯を丼でご堪能あれって感じた、俺たち作らなくても満腹

じゃないか。

ホカゾノも同じ事を思っているらしい、カオリをチラチラ見ながら苦笑してる、気持ちは判るぞ。

さて、となると俺たちの求められるのは質だ、量に関してはカオリさんが一人で無双してるし。

まあカルパッチョは良いだろう、元々がつつりしてないし。だけど鶏肉とかは止めよう、胃袋がトラウマを抱えそうだ。

ホカゾノに上手く目配せして、伝わったのか鶏肉を仕込んでいたポウルを冷蔵庫に戻す、すまないな、今度の夕飯にでも食べよう、今日は炒飯だ。

ホカゾノは冷蔵庫をがさご探して、海老の剥き身を取り出した、まさかエビチリ？

いや、確かにそれなら上手く炒飯に合わせることが出来る、でかしたぞホカゾノ！

心の中でガッツポーズ、お互い目が合ってハイタッチ。さて当のカオリは何だか馬鹿デカイ中華鍋を取り出して、何故かご飯から炒め始めた、そんな鍋この厨房にあったかな？

ご飯を炒めたらその中に解いた卵をブチ込む、あおり炒めなのですね、流石はカオリさんだ。

だけどカオリさん、ご飯一升はやり過ぎだよ、誰かの胃袋が風船に針を刺したみたいに破裂するよ。

ホカゾノを見たら一心不乱に無駄な動きをしながらエビチリ作ってた……腹を空かす作戦か！？

今日ほどお前に共感できる日はないよ、泣くな。

しかし、善意100%の嫌がらせてこんなに辛いんだ、悪夢だな。二人して踊ったりしながら料理してるから、厨房は今だけリオデジヤネイロ。

さあここでカオリさん、卵まみれのご飯に追加しますは炒飯の素、本当に練習したんですか？

昨日までの景色が嘘に思える、実はカップ麺にお湯を注いでただけ

だったのかな。

ホカゾノは狂気の踊りに勤しんでる、もうエビチリ作成は進まない、塩の代わりに涙を入れてる。

「お兄さん、壁にテープ直接貼っても……やっぱいいや。」

弟くんが一瞬顔を見せてすぐに戻って行った、だよな、何があったのか想像つかない光景だもの。

厨房に入ったらオツサン二人がリオのカーニバルもびっくりなダンスしながら料理してる光景、正直自分でもおぞましい。

もう最初の目的すら怪しくなってきた、何で俺は踊ってるのか。気が付けば完成しているカルパッチョにラップして、冷蔵庫にしまっ。

さて、客席の様子でも見に行こうかな。

チラッとカオリの方を見ると、なんとあんかけにチャレンジしようとしている。

ホカゾノはそれを見て絶句し、目の前に完成したエビチリを見やる。そっだよな、炒飯の味のバリエーションを増やす目的で作ったもんな、これじゃ単に胃袋へ更なる負荷を掛けるだけだよな。

俺がさっぱりした物を作ったから別の方向性で攻めたのに、あれじやエビチリをあんかけ代わりにできもしない。

ホカゾノが遂に崩れ落ちた、殉職したホカゾノに敬礼。

客席に出てくると、そこにはなんと！……俺の眉間へと飛んでくる紙飛行機。

咄嗟に避けると、紙飛行機は厨房の方へ、良く飛ぶなあ。

「あ、踊りは終わったの？」

「あれ？ホカは？」

「彼は全力を出して敵と戦いましたが、奮戦実らずグリストへと還っていきました。ホカゾノに敬礼！」

三人で再敬礼、君との日々はまあまあ楽しかったぞ。
フロアを見渡すと、結構作業は進んでいるようで、特に手伝う事もなさそうだ。

「珍しく真面目に作業してんじやんか。」

「ふっふっふ、伊達に料理役立たずコンビじゃないぜ！」

「いや、俺は多少料理できるし。」

「早々に裏切り!?」

「ま、まあちゃんとやったなら良いんだ。」

弟くんが泣きそうだがとりあえず放置しよう、彼らには話し合いが必要だ。

厨房に戻ると、俯せに倒れたホカゾノの頭に紙飛行機が突き刺さっていた、上手く飛んだなあ。

「カズくん、そろそろ出来上がるよ！」

「おお…っつてっおっ!?!」

でっかい丼に山と盛られた炒飯は、我らが日本の象徴富士山が如く、あんかけが雪のようにかけられていた。

ただし、所々片栗粉がそのまま残ってるのが気になるが。

「カオリ、誕生日おめでとう！」

「おめでとう〜！」

「ひゃっほうー！」

「うひゃあい！」

「お前ら、少しは日本語喋る努力をしなさい。」

「二人ともありがとう！」

「俺たちは無視ですよキヨシさん。」

「ええ、おかしいですね、今日は俺の扱いがみんなして酷い。」

「さて、お待ちかねのご飯を食べてみましょう。」

「おっとその前に、カオリ、プレゼントだよ。誕生日おめでとう。」

俺はポケットから小さい箱を取り出した、中身は有名ブランドのネツクレス。

「ありがとうございます！大事に使います。」

「ならウチも、おめでとunggざいます。」

ホカゾノが何かを取り出した、袋自体は薄い。

カオリが開けてみると、出てきたのは意外におしゃれなエプロンだった。

「ホカゾノにしては上出来すぎるだろこれ。」

「うん、かなり意外な感じ。でもありがとうホカゾノ、たまにはやるじゃん。」

「たまにはって…。」

「さて、真打ちは最後に登場ってね！」

「さて、ご飯にしよう！」

「HEY！HEY！HEY！お兄さん、それはちよいとおかしな流れじゃねえですかい？」

「ええい五月蠅い、いちいち発音良くするな。それと、ゴミ箱はあつちだぞ。」

「さあカオリさん、これをどうぞー！」

「おい、シカトかコラ。」

「何だろっ……っわ。」

箱から出てきたのは案の定と言うか、ピンクのバイブ、ついでにローション。

カオリはちよいと引き気味、そうだよな、こんな馬鹿腐ればいい。

「あれ、反応が薄いな？」

当然だ馬鹿者、脳ミソに蛆でも湧いてるのか。

さて、残りはヒロト。

だがこいつも下らない物を買ってるはずだよな。

ヒロトはちよっと悩んだあと、手に持っていた包みを脇に置き、新しい箱を取り出した。

「何それヒロト！？自分だけ代わりの物を用意してるとかズルくない！？」

「キヨシ……もっと賢く生きなきゃ。」

「裏切り者ー！」

キヨシ、崩れ落ちる。

誰も気に留めず、ヒロトのプレゼントが手渡された。

中身はマグカップが二つ、どうやらペアになってるようだ。

「ホカゾノに続きヒロトもセンスを感じるな…それに比べてこの愚弟は。」

「止めて〜、見ないで〜！」

「せめてまともな物とセットだったらまだマシだったろっに。」

「おふざけは程々に。」

「ヒロトだって直前までふざける気満々だったじゃん！」

「黙れよ。」

「はい。」

「まあまあとりあえず、今度はあたしからプレゼントって訳でもないけど、ご飯だよ。」

カオリが厨房に行き、デカイ丼を四つ持ってくる。

俺とホカゾノもそれぞれ持ってきて、テーブルに並べた。

テーブルには白身のカルパッチョとエビチリと、大食いチャレンジかと思うような炒飯の山脈。

正直に言おう、不味そうだ。

このあんかけが台無しにしている、何もなければまだ食べた、量は馬鹿としか言えないが。

他の二人は初見だからな、啞然とするのも無理はない、もう食い切らなきゃならない流れだしな。

これから終わりにない戦いに従事する胃袋戦士諸君。

明日は無情にも仕事だ、そして恐らくカオリはこの炒飯を味見していない。

己の限界に打ち勝て。

カオリを除く全員の意識が、生き残るとい言葉に収束した。

「それじゃあ皆様……………ご武運を！」

「?……………乾杯！」

『乾杯！』

第一次炒飯事件は、グラスを打ち鳴らす音によって始まってしまった。

昼のピークが終わり、今は夕方に入る少し前。

俺は客もまばらな店内を見渡しながら、洗い終えたグラス等を丁寧に拭いていた。

カオリは店の端に備え付けられた端末で事務作業中、三馬鹿トリオは目の前のカウンターで遅めの昼食を摂っている。

穏やかな昼下がり、外は天気も良く、休みなら皆でバーベキューでもしたくなる陽気だ。

「はあ、久しぶりに暖かいなあ。そうは思わないかいお兄さん。」
「そうだな、最近は少しずつ寒くなってきてたし、秋が近づいてるな。」

「兄さん、珈琲お代わり。」

「自分で淹れる馬鹿。」

カランカラン。

「いらつしゃいませ……珍しい客だな。」

「え？……マジカル！？」

ホカゾノが入り口を見て固まる、そりゃそうだよな。

そこに立っているのは、身長180は越える巨漢。

しかし顔は優しいげで、どこか親近感を抱かせる青年。

現在はとあるプロ野球チームで活躍している。

彼は俺に挨拶すると、ホカゾノの隣に座った。

「久しぶりカズ。」

「ああ久しぶり、テレビとかで活躍は見てる、案外元気そうだな。」

「ありがとう、頑張ってるよ。」

「今日は突然どうした？」

「休みが作れたからカズに会いに来たんだ、今練習してるところから結構近いからさ。」

「ほお…ま、ゆっくりしていけ、珈琲で良いか？」

「いやいやいや兄さん、なに普通に会話しちゃってんの？まさか来るの知ってたの？」

「馬鹿かテメエは。今事情を聞いてただろうが。」

「にしても久しぶりだな。」

「ヒロトさんも久しぶりです。」

「おいおい、俺を忘れるなよ！」

「ああキヨシいたの？」

「最近扱い酷くない！？」

「まあまあ良いじゃねえか……でかくなったな、ハル。」

珈琲を我が弟に手渡す、ハルは苦笑しながら受け取る。すると事務を終えたカオリがカウンターにやってきた。

「ハル君久しぶり。」

「お久しぶりですカオリさん。」

「前に会った時よりもっと大きくなったね。」

「カズを越えましたから。」

「やれやれ、空気を読んで越える手前で止まれよな。」

「ぷぷつ、弟に抜かされる兄さん。」

「休憩中も俺に殴られたいとは随分と熱心なマゾだな、表へ出な！」

「あはは、相変わらずって感じだね。」

それからはこれまでのお互いの話をして盛り上がった。

俺たちが居なくなっただけの話や、プロになるまでの話など。

「でもカズが居なくなっただけからはやっぱり寂しかったなあ、家も広く感じたし。」

「親父たちは元気なのか？」

「元気だよ。リカコが独り立ちしてからは旅行とか行ったり楽しんでるみたい。」

「そうか、なら良かったよ。リカコは元気かなあ。」

「あの性格だからね、まだ結婚の話も聞かないし。」

「なあハル、プロなんだしウチに金くれよ！」

「えっ？」

「キヨシ、その馬鹿殺せ。」

「了解ボス！」

「ふふん、キヨシごときには殺されないぜ！兄さんなら話は別だな！」

「よし、兄さん張り切っちゃうぞー！」

「や、兄さん。フリじゃないから、張り切らなくて良いから。」

そんなやり取りを見て、ハルが思いつきり笑いだした。

「あははははは、やっぱりカズ達は楽しそうだ。俺もこっちに来れば良かったよ。」

「止めとけ、疲れるだけだぞ。」

「そうだね、俺は野球を頑張らないと。」

「今日はいつまでいれるんだ？」

「ん……夜には戻るよ、明日も早いから。」

「そうか。なら夕飯くらい食べていけ、時間が大丈夫ならな。」

「うん、それくらいなら大丈夫。ご馳走になるよ。」

「一食五千円になります。」

「ええっ!?!？」

「ヒロト、やっつけてしまえ。」

「オツケー。ヒロイさん、刀借ります。」

「武装反対！」

「キヨシ、ホカを押さえといて！」

「任せろヒロト！」

「普通に刀がある店ってここだけだろうね。」

「ハル君、珈琲お代わりいる？」

「あ、いただきます。すみませんカオリさん。」

「良いよ、気にしないで。」

「あのう、失礼ですがプロ野球選手のヒロイさんですか？」

「え？ああ、そうですよ。」

「ボク大ファンなんです！サイン下さい！」

「ありがとう、もちろん良いよ。カズ、何か紙とかあるかな？」

「流石に色紙はないけど、それで良いかな？」

「あ、はい！マスターありがとう！」

少年はサインを受け取ると、お喋りに花を咲かせる母親の席に戻っていった。

「やっぱプロ野球選手ってのは人気者だなあ。」

「いやいや、他の選手はもっと凄いから。」

「なあなあハル君よ、ウチに金くれよ！」

「もう良いぞハル、そいつ摘み出せ。」

「ほお、やるのかハル君よ。ウチに勝てるかな？」

「ホカゾノさん、俺は強くなっただんですよ！」

「はいレディ……ファイ！」

馬鹿はハルに突進すると、ハルは腰を落として猪馬鹿を受けとめた。叫び声を上げて押し出そうとするが、ハルはニヤリと笑ってホカゾノを持ち上げる。

こりゃ負けたな馬鹿。

そのまま外に運ばれてく、哀れ。
すると外で驚いたような声が聞こえて、何故か笑顔になった二人が戻ってきた、誰か後ろにいるな。
ハルの後ろに隠れているのは女性みたいだ、細い足が見え隠れしている。

「兄さん兄さん、今日はマジで珍しい日だな。」
「確かに。俺とこいつが一緒の日に来るなんてね。」
「なんだ二人して気持ちが悪いな、誰が来たって？」
「私のことを忘れちゃったのカズ兄ちゃん？」

「は？」
まさかとは思うが…。

「久しぶりカズ兄ちゃん、元気だった？」
「ホントに……まさか姫まで来るとはね、今日は何の日だよ。久しぶりだなりカ、お前も真面目になったのか？」
「それなりに、流石に仕事じゃサボったりしないよ。私生活は相変わらずだけど。」

「まあお前のその女つ気のない格好を見ればなんとなくは想像つく、どうせ休みの日は読書ばかりだろう？」

「何だよもう、久しぶりに会った途端にお説教？」
「違うつつうの。ま、とにかく久しぶりだ、ゆっくりしてけ。」

「いやありカコがこんなになってるとは……俺と付き合わないか？」
「黙れ愚弟、余裕のない無様を晒すな。」
「ならウチと。」

「ひっばたいて良いぞ姫。」
「ハル君よろしく！」
「何で俺が!？」

「てか背高くなったな二人とも、俺はあんまりヒロイさんちに行っ

てないから余計にそう思う。」

「リカちゃん、綺麗になつたね〜！」

「カオリちゃん、久しぶり〜！」

和気あいあいといった風だな、まったく面白い一日だよ。

カウンターには俺の身内だけしか並んでない、てか三馬鹿トリオ、お前らの休憩は終わりの筈だが何でまた煙草に火点けてんだ？

仕方ないな、今日は早めに閉店するか、あんまりお客さんも来ないみたいだし。

ハルにサインを求めた家族も居なくなり、それから暫く客が来ないのを見計らって閉店にした。

閉店作業中もずっと昔話に花が咲いていた、懐かしい話ばかりだ。

ホカゾノがしょっちゅうウチに泊まっていることに慣れたこととか、皆でモンハンやったこと、リカコの遊びはあまりにつまらなそうで付き合わなかったこと。

昔を懐かしむのは歳をとった証拠と言うが、そりゃみんな歳をとったさ。

あんなに生意気だったりカコは今じゃ立派に社会人だし、ハルにいたってはプロ野球選手だ。

俺たちも頑張つてこうして働いている、日々は変わってく。

……でも変わらないものもあるな。

目の前に広がる光景を見れば嫌でもそう思える、誰もが昔のままにこうして集まってる。

大切にしていきたいな。

「ならウチらへの暴力を減らしてください！」

「……ナチュラルに人の心を読むんじゃねえボケ！」

「な〜に浸っちゃってんのお兄さん？」

「うるせえぞボンクラ！その口、二度と開けないように縫い付けてやるうか！」

「一番変わってないのってカズくんだよな。」

「俺もそう思います、アルバイト時代の光景と何も変わらないし。」

「カズは相変わらず暴虐の武神だな。」

「私も交ざろうかな。」

『止めとけ死ぬぞ！』

結局はか騒ぎは夕飯まで続いて、随分と賑やかな1日は終わろうとしていた。

二人を見送りに隣町の駅前まで行く。

ハルの背中をばしんばしん叩く馬鹿二人と、リカコと抱き合ってるカオリ。

俺はヒロトと二人、それを眺めて苦笑する。

二人は切符を購入し、改札を抜ける。

「また来るよカズ！」

「おう、気を付けてな。」

「また来いよこの野郎！それまでにお前を倒せるくらい強くなるからな！」

「俺はもつと強くなってますよ！」

「次はお土産持ってこいよ！」

「考えとくよ。」

「バイバイみんな！」

「またね〜リカちゃん！」

「カオリちゃん、カズ兄ちゃんと仲良くね〜！」

「少しはだらしのない生活直せよリカ！」

「余計なお世話だ〜！カズ兄ちゃんバイバイ！」

二人が手を振りながらホームに降りていくのを、俺たちは見えなく

なるまで見送った。

ちよっぴり寂しい気持ちになりながら、俺たちは俺たちの店に帰る。
また明日から頑張ろうか、あいつらがまた来られるように。

寒さが身に染みる、本格的に秋が到来してきた。

そんななか俺たちは、ビニールシートと弁当を持ってとある公園に
来ている。

紅や黄、橙が織り成す鮮やかな風景。

日本ならではの季節に感動しつつお猪口を傾ける、うん、最高で
す。

パン！

……。

パンパン！

……。

「食らえ、我が奥義を！旋風槍！」

「まだまだ！ウチの技の冴えを見よ！無双連斬！」

「ふん、貴様の剣には決定的に誇りが欠けている！」

「は、お前の体には残念なくらい身長が欠けている！」

「図に乗るなよマウンテンゴリラがー！」

「貴様らには憐れなほどに知能が足りておらんわー！」

容赦ない俺の一撃が、馬鹿共を吹き飛ばす。

地に伏した馬鹿共が動かないのを確認すると、俺は再びお猪口を傾
けた。

そう、今日は近くの自然公園に来ている。

紅葉を見るために今日は閉店、まあずっと休みなく開店していたからな。

たまにはゆったりと休日を満喫したかったのだが、どうやらこいつらは大人しくするという言葉に疎いらしい。

何処からか調達した竹刀と木槍で派手にチャンバラを始めたのだ、じっとしていられない病気なんだろうな。

隣ではヒロトが暖かい日差しの中で昼寝をしている、確かにうたた寝したくなるくらいの陽気だ、これこそ正しい平日の公園の風景ではなかるうか。

少なくとも来て早々に手伝いもせずチャンバラと洒落込むには適さない環境だ、何人が遠巻きに憐れむ目で見ていたぞ。

ひらひらと舞い散る紅葉を、穏やかな気分で眺める。

するとホカゾノが起き上がり、俺に竹刀を向けると突然言い放った。

「テメエがセイバーか？」

「そういう貴様は判りやすいな、その図体……どう見てもマウンテンゴリラだ。」

「ふふん、まあ年寄りな兄さんはそこで酒でも飲みながら余生を過ごせば良いさ。なあキヨシ？」

「お兄さんにはもう戦うだけの体力もないのさ、挑発にも乗れない年増だからね。」

「上等だテメエ今すぐ……。」

「へえ、つまりカズくんより年上のあたしにも喧嘩売ってるんだね？」

隣で俺のお手製弁当を食べていたカオリが、凄く楽しそうな笑みで立ち上がった。

「いやいやカオリさん、全然そんなことないですよ!？」

「そ、そうですとも!カオリさんはずっと若くお美しい。」

「ああん？今更謝つても遅いんだよ！」

「俺たちを怒らせたらどうなるか、その身をもって思い知れ！」

俺は傍に置いてあつた刀袋を掴むと、中からかなり古い刀を取り出した。

初めて手にした刀だ、銘は呂鞘、学生時代からずっと持つてる愛刀だ。

隣ではカオリが俺の鞆からリボルバーを二挺取り出し、弾薬を確認する。

「さてキヨシ、ウチらはあの魔王と戦女神、同時に相手にしなきゃいけないらしいぞ。」

「まったく、悪魔でも失禁しそうな組み合わせだ。でも俺たちは泣いて逃げる訳にはいかないんだ、世界の平和がかかっているからな。」

「ああ、あれが世に放たれたら大変なことになる、世界が5秒で滅ぶだろうな。」

「な〜にファンタジーの主人公気取ってやがる、テメエらはその器じゃねえよ！」

「さあカズくん、早く片付けてお昼寝しよう。もちろんカズくんの腕枕で。」

「そうだな、手早く済みますか。」

「行くぜキヨシ、最初から全力だ！」

「はっ、俺に指図すんじゃないやねえよ！テメエもテメエの身はテメエで守れ！」

戦闘開始。

カオリの精確無比な弾丸が、馬鹿共の額に向かって速射される。

その弾丸の風の中を、俺は迷わずキヨシへと突撃していた。

二人は弾を躲したり弾いたりしつつ、俺の接敵に身構える。

怒濤の如き俺の剣舞が、キヨシの槍を削っていく。

「相変わらずの化け物ぶりだぜお兄さん！」
「ふん。そういう貴様も良く捌く。」

その最中、ホカゾノが少しずつカオリの方へとにじり寄っている。俺は剣で槍を弾くと、回し蹴りでキヨシを蹴り飛ばした。

「ぐはっ！」

「怯んでる暇はないぜ！行け、カオリ！」

「あたしの本気を見せちゃうよ〜！」

カオリはアサルトライフルを構えると、寝そべる姿勢でフルバーストをブチかます。

次々とマガジンを入れ換えて、まさに暴風のように弾が飛んでくる。俺たちはその中で剣劇を上映する、戦いは苛烈を極め、ふと見ると近所のおじさんたちが観戦に来ていた、何やら賭けまでしてらしい。

「兄さん随分と攻めが緩いな、もっと来いよ！」

「まだまだ俺らは捌けるぜ！」

「そりゃ悪かった、ちよつと冗談が過ぎたかな？」

俺は刀の動きに格闘術も織り交ぜて、更に攻撃の勢いを強めていく。優しく手解きするように、しかし確実に実力差を思い知らせるように、より苛烈、より怒濤、暴風の追い風を受けて刀が唸る。

「キヨシ、あれを使うぞ！」

「なにっ、もう使うのか!？」

「兄さん相手に遊んでる余裕がなくなった、今日はカオリさんまで居るんだ、兄さんが本気を出したりしない!」

「大正解だ、戦局の見極めは大事だな。」

「一撃が勝敗を決めるな、このままだと負けるだけだ。」

「よし、いくぞ我らが最終奥義！」

『すいませんでしたー！』

二人が全力で土下座、しばし思考停止。

『馬鹿め、隙だらけだぜー！』

「調子に乗んなよボケがー！」

「舐めた真似してくれたじゃん！」

「もう少し気の効いた技は思いつかねえのか！」

「いやあ、これしか思いつかなかった。」

「兄さん相手じゃ隙も作れないし、地味に効くかなって。」

「……覚悟はいいか野郎共。」

刀と銃の和洋コンビネーション、二人は土に還りました。

さて、ヒロトとカオリと俺の三人だけで昼食を済ませると、あとはのんびりした時間が過ぎていった。

馬鹿の体力には底がないのか、ホカゾノはヒロトと一緒にバドミントンをはじめた、そういや二人とも部活仲間だったな。

俺は要求通りカオリに腕枕しながら、キヨシとしりとりしてた、当然だが終わらない。

やがて飽きたのかキヨシはバドミントンに行き、俺は片手で本を読んでいた。

「あ、兄さんが官能小説読んでる。」

「死ね。」

「あ、お兄さんが官能小説でハアハアしてる。」

「腐れ。」

「あ、ヒロイさんがラノベ読んでる。」

「黙れ……ってあれ？今の誰だった!？」

「兄さん酷っ、ヒロト向こうで黙っちゃったよ?」

「ヒロトは変なこと言ってるのにね、可哀想だなあ。」

「ヒロト悪かった、つい流れで。」

「兄さんサイテー!」

「下衆や鬼畜だってここまではしないわ!」

「悪気はないんだ、すまなかった。」

「いや、全然いいんですけど。」

「兄さんの悪魔、魔王!」

「女たらし、守銭奴!」

「ここぞとばかりに「ごちゃごちゃうるせえぞ!」

「うわ、ヒロイクンサイテー。ヒロトくんに謝って!」

「そうよそうよ!謝ってよ!」

「貴様らはめんどくさい女子高生か!？」

「今どき女子高生だってこんなことしません。」

「だったらやるなよ!」

「てかマジ、お兄さんの淹れる珈琲ちょべりぐって感じなんだけど。」

「古いつ!?死語にも程があるぞ!」

「判っちゃうあたり俺らも歳とりましたね。」

「……ヒロトの言葉が一番効いた。」

そうだよな、最近の人に同じこと言っても訳判ないだろうな。

うわ、俺オツサンやん。

本を読む気力も失せて塞ぎ込む。

「勝者ヒロト!」

「俺の実力ならこんなものさ。」

「さあ勝者にインタビューのお時間です。ヒロトさん、今回の勝敗の決め手は何だったでしょう?」

「年齢に対して容赦なく決ることでしょうか。」
「流石ですね、さりげなく容赦がないのは味方の時は心強いです。」
「こいつが敵に回ると精神的ダメージがデカい、兄さんは物理的ダメージだけだ。」

ボクは心が弱いのです。

さて、そろそろ時間も遅いし、帰り支度をしなくちゃな。

「さあ、そろそろ撤収！」

「ホカゾノ達は荷物を纏めて、あたしはシート畳んだりするから。」

「了解ッス！」

「よし、俺は監督だな。」

「働けし兄さん。」

「や、俺は年寄りだから。」

「うわ、遂にそれを理由にサボりだした。」

「さ、年寄りは放っておいて片付けよう。」

「確かに俺が悪いが、それはあんまりだよヒロト。」

手早く荷物を片付けると、俺たちは店に向かって歩きだす。

まあ当たり前のように騒ぐから、随分と時間はかかってしまったが、
ホント、飽きないな。

「ねえヒロイさん。」

「ん〜？」

「俺も兄さんって呼んでいい？」

「残念だがダメだ、そうになると馬鹿とヒロトの区別がつかなくなる。」

「

「確かに。」

「すまないな、別に嫌とかではないんだ。」

「それで兄さん……。」

「ダメって言ったじゃん!？」

「じゃあホカに兄さんの事を神様って呼ばせよう。」

「無理、三行でキレル。」

「ダメかー。」

それきりヒロトは壁に寄りかかって仕事をしなくなった、はあ。

ふと視線を変えると、ホカゾノが新作のパフェを作ろうと試行錯誤していた。

ウチにあるパフェはチョコとバニラだけ、正直あまりにもメジャーだ。

という訳で、今度から季節毎のフルーツを入れたパフェを考えてもらっているのだが。

何やらメモを書きながら考えてるし、ちょっと覗いてみる。

栗。

ペースト状にしてアイスにしたら美味そうだ。

銀杏。

………どうやってパフェにするんだ？

紅葉。

いや、葉っぱは食えんだろう。

秋刀魚。

いや、秋刀魚で。

鈴虫。

食えよ？

たんぽぽ。

もはや秋ですらなくなつた！？

すると馬鹿が下の棚から虫籠を取り出した、おいまさかよりもよつてそれチヨイスか！

「馬鹿野郎、こんなところで実験すんじゃねえ！」

「え、なに兄さんどしたの！？」

「またいつもの冗談だと思って見てりゃ気持ち悪いもん出しやがって、常識的に考えるアホめ！」

「だから何が！？」

「新作パフェを鈴虫の標本にでもするつもりか！」

「いや、これ栗だけ。」

「……………は？」

ホカゾノは虫籠の蓋を開けてひっくり返す。

すると中からは形のいい大きな栗がゴロゴロ出てきた。

……………。

ホカゾノは自分が書いたメモを見て、ニヤニヤとうざったい顔になる。

「あれ、兄さん、まさかとは思うけどこのメモで焦っちゃった？」

「……………」

「流石のウチも自分が嫌いな虫を入れるわけないじゃんか、ぷぷつ。」

「

いっそ入れろ、そして食え。」

「いやいや、ウチが作ろうとしてるのはたんぼぼ。」
「チヨイスの酷さは変わらない!?」
「まあたんぼぼは手に入らないけどね、別に美味しくもないし。」
「もう栗で良いじゃん! 無難だし美味しいよ!」
「それじゃ面白くないやん!」
「お前は食べ物にまで面白さを求めるんか!」
「バニラパフェたんぼぼ添え、良くね?」
「要らねえよたんぼぼ! 添えただけで味は変わらないじゃん!」
「因みに二百円増しです。」
「クソ要らねーうえに金取るの!?!」
「いやいや兄さん、この時期のたんぼぼは高いから。」
「だから栗で良いじゃん! なにお前たんぼぼになんの思い入れあんだよ!」
「青春の代表花……は桜。」
「拳げ句違うな!」
「まあでも栗はちよつと……。」
「何だよ! 栗にトラウマでも抱えてんのか?」
「や、面白さに欠ける。」
「いよいよ黙らねえとブツ殺すぞ!」
「ウチは普通に興味ありません!」
「大丈夫だよ! お前は十分に普通じゃねえよ、ド阿呆だよ!」
「ちよ、そんな褒めんとして、照れるやん。」
「褒めてねえ!」
「さ、そろそろ兄さんもツツコミ疲れたでしょ? 諦めてたんぼぼを認めるんだ。」
「認めたらパフェ売れなくなるわ!」
「すみませ〜ん、パフェくださ〜い、バニラで〜。」

言ったそばからお客がパフェを注文してくる、今の会話が聞こえなかつたかド畜生。

ホカゾノは嬉々としてバナラパフェを作り、最後にそつと取り出したたんぽぽを添えた、てかもう買ってたんかい！

オーダーリストにはすっかり二百円追加されてる、ホントにやりやがった、あの客馬鹿か？

ホカゾノは得意げな笑みで俺を見ると、またもニヤニヤ笑いに変わる、毎度毎度ウザい。

「ほら兄さん、やはり秋の新作はたんぽぽで決まりだね！」

「判った、たんぽぽは認めてやる。だがせめて春にしよう、秋なんだから栗にしよう。」

「はあ、仕方ないな兄さんは。やれやれ我が儘なんだから。」
「くううう。」

マジムカつく、マジムカつく、マジムカつく！

この「勝った！」みたいな顔がムカつく、春までに細かく刻んで魚の餌にしてやるうか。

するとキヨシが元気よく扉を押し開けて入ってきた、扉壊したら壊すぞこの野郎。

「お兄さんごめん、店の看板壊したー！」

「はあ！？」

「いやあ、つい。」

「なにしゃがつてんだテメエ、馬鹿なのか？遂に脳ミソ沸いたか？」

「いやね、聞いてよお兄さん。ちゃんと事情があるんだからさ。」

「一応聞いてやる、何だ。」

「まず前提として、俺は槍が好きだ。」

「……………ああ、それで？」

「んで、さつき外を掃除したら脆くなってたんだろうね、箒の先が折れた。もう判るでしょ！」

「つまり貴様は思わぬアクシデントで手に入った長い棒を持ってテ

ンションが上がってしまい、思わず槍の練習を始め、振り回してる最中に勢い余って傍にあつた看板を殴ってしまい壊れてしまったと？」

「流石はお兄さん、驚異的洞察力だぜ！まあ丁度良かったと思ってるんだ。あの看板、結構ダサかつたし、替え頃なんじゃない？」

「確かにそうだな、あれは酷かつた。俺も買い替える口実を探していたんだ、偉いぞキヨシ。」

「やっぱお兄さんは話が判るや！」

ホカゾノは気配を感じ取ってそそくさと退散していく、因みにヒロトはいつの間にかタバコを吸いに行つたようだ。

お客さんも見慣れているからか、キヨシから少しでも距離を放すために椅子をずらし始めた。

「さてキヨシ、俺は何かお礼をしなければなるまいな？」

「おお、まさかお兄さんがそこまで評価してくれているとは。」

「そうだな、ではとても愉快的場所に連れて行ってやろう。俺も行き付けの場所だな、良く友人と楽しいお喋りをするんだ。」

「それは何やら楽しそうだね、してその場所は？」

「地獄に決まつてんだろボケがあ！ざけんなよ teme、看板だつて口八じゃねえんだぞ阿呆が！」

俺は怒りに身を任せ、傭兵のスカウトでも来そうな速さで拳銃を抜くと、まさに鬼の形相で乱射した。

逃げ惑う愚弟、チャールズ・ホイットマンも裸足で逃げ出しそうな勢いだ。

今の俺ならわざわざ時計塔に登までもねえ、機関銃抱えてワীগナ一流しながら、どこぞのスクランブル交差点で大暴れできるぜ。

客も引くくらいの笑みでキヨシを蹴り倒しひとしきり悲鳴の旋律を奏でると、俺は何事もなかったかのようにカウンターで洗い物を始

める、やれやれまた無駄な出費がかさむ。

「おいホカゾノ。」

「はいっ！」

「季節の新作パフエはマロンで決まりだ、明日から出す、今日の内に買い物と仕込みを済ませておけ、八百屋のおじさんなら安値で取引してくれる。」

「了解しましたマスター！」

ホカゾノは元気よく返事をする、逃げ出すように店を出ていった。丁度そこにヒロトが戻ってきて、床に倒れて嗚咽を漏らすキヨシにぎよっとする。

「ヒロト、そろそろ仕事に戻れ、次は俺の休憩だ。」

「はい、判りました。」

「お前は偉いな、余計な手間をこさえない。」

フフフフと笑いながら隣を抜けると、ヒロトは少し震えていた、何か怖いことがあったのかな、フフ。

俺はタバコを吸いに、店の裏に造った喫煙スペースに行く。

するとそこには事務を任せていたカオリがいて、まさにタバコを吸おうとしていた。

「おや、そちらも休憩かな？」

「キリが良かったから……って、凄い顔してるよカズ君、何かあったの？」

「流石にカオリは怯えないな。」

「そりゃ昔から見慣れてるから。どうせあいつらがまた何かやらかしたんでしょっ？」

「まったく、カオリには恐れ入る。」

俺はあいつらの下らない話を聞かせ、カオリは溜め息を吐いた。

「はあ、せっかく仕事が終わりそうだったのに。」

「今日は俺の部屋で飲むか？」

「カズ君から誘ってくれるなんて珍しいね、もちろん飲みたいよ。」

「了解、つまみも何か作るよ。」

一服を終えて、お互い閉店まで頑張る、たまには夫婦水入らずつても良いだろう。

てか恐らく俺は働きすぎている、たまにくらいは罰も当たるまい。

……………甘かったよなあ。

「それではウチが音頭を取らせてもらいます！」

「おおー！気の効いた音頭を頼むぜー！」

「良いから早く飲もう。」

「あはは、たまにはちゃんとやれよー！」

「……………」

「どしたの兄さん、元気なくね？」

「せっかくの飲みの席だ、テンション上げてこっぜお兄さん！」

「……………お、美味しいなこれ。」

「こらこらヒロト、もう飲んじやったの？」

「……………はあ、もう好きにしろよ。」

「よし、マジお疲れ！」

俺は無気力にグラスを持つと、溜め息混じりに酒を煽った。

はあ、今夜はまったりしたかったのに。

目の前ではテンション高い馬鹿共が、俺が用意したつまみを次々と貪ってる、ああ俺のきゅうりキムチが。

内心落ち込んでいると、カオリがそっとな俺の肩に頭を預けてきた。

「いつもお疲れ様です。」

「…その一言で満足だよ。」

「うわゝ、イチヤイチヤが始まった。」

「いや良いんじゃないのか？夫婦なんだしさ。」

「ヒロト、これは黙って見てはいけないんだ！全身からひがみや嫉みを絞りだせ、それをお兄さんにぶつける！」

「ウチも嫁さん欲しい、ウチも嫁さん欲しい、ウチも嫁さん欲しい
！」

俺はそつとカオリを抱き締めると、馬鹿二人に向かってニヤリと笑つてやった。

「ふふん、俺は幸せ者だぜ！」

「ウチのこの魅力に気が付かない世の中の女が悪いのさ、節穴だぜ。」

「俺のこの溢れんばかりの紳士っぷり、あまりに紳士すぎてみな遠慮しているのだろう、いやあ俺って罪な男だわゝ。」

いや、そんな考えに至れるお前らの頭の中が罪だよ間違いない。
ま、今日もつるせえ一日だったな。

真っ白な雪が降っている。

ふわふわと踊るように、キラキラした結晶が灰色の空から落ちてくる。

それは俺たちの住む町を覆い隠し、純白の世界を作り上げていく。今年の初雪。

それは夜の内に地面を隠すと、朝までには止んでいた。

俺は眠気を覚ますため窓を開け、その美しい純白の世界を見た。まぶしいくらいの白は、光輝いて白銀にも見える。

気の早い小学生たちは、既に雪合戦をしたりと大忙しだ。

楽しそうな笑い声が、俺の口元にも自然笑みを浮かべさせる。

「オラオラオラ餓鬼ども！ウチに勝てたらそのカフェで好きな物を食わせてやるう！」

「よし、負けないぞー！」

「あのオッサン倒せー！」

「ふはははは、ウチはそう簡単に倒せないぜ！何しろいつも魔王に遊ばれてるからな、貴様ら全員ブツ潰すぜ！」

起きて早々に頭が痛くなりそうな光景だ、可愛らしいちびっこの中にウチの馬鹿が紛れ込んで勝手なことぬかしてやがる。

しかもその馬鹿は、小学生の群れに取り囲まれ、四方八方から雪玉のリンチを受けていた。

いやもう、反撃とか出来ないでしょ、雪を拾う動作の度に10発は飛んできてる、あれをリンチと呼ばないなら公開処刑だな。

「ちよ、痛い、グホツ、痛っ、おいつ、冷たい！」

「あはははははは！」

「ぶつとばしてやる〜！」

「このガキが、ブツ潰す！」

うわ〜、大人気なく本気モードかよ。

飛んできた玉を掴んでは、投げた奴の顔目がけて投げ返す。

あれじゃただの悪漢だろうが、つたく。

俺は大暴れする馬鹿に向けて上から声をかけた。

「おいホカゾノ、あんま調子に乗るな。」

「げっ、兄さん。」

「そのちびっこたち。今から俺がそいつを止める、その隙にブツ倒せ。」

「マスターありがとー！」

「兄さん、何でそつちの味方なの!？」

「子供を蹴るのは心が痛むが、貴様を蹴ってもまるで痛まないからだ！」

「この鬼畜ー！」

「ふはははは、さあ踊れ！我が掌の上で！」

「俺たちもいくぞー！」

俺は上からアサルトライフルを、ちびっこたちは四方八方から。

ホカゾノは躊躇いなく容赦なく、無邪気な暴力に蹂躪される。

ホカゾノが雪にまみれて動かなくなると、俺は下に降りてちびっこたちを店内に入れてやった。

「もう少ししたら準備できるから、それまでテーブルで大人しく待つように。わかったかな？」

『はいー！』

「うむ、良い返事だ。」

「マスターには逆らうなってお父さんに言われたー！」

「そうだな、挑む相手を間違えるのは良くない。ウチの連中には挑まないのが賢明だ、無闇に強いからな。」

「ねえマスター、あの人ほっというて平気？」

「あの馬鹿は例え月が降ってきても死なないから安心なさい。」

『はい！』

俺は素直なちびっこたちに微笑みながら、開店の準備を進めていくやがて時間になると、キヨシたちが首を傾げながら入ってきた。

「なあお兄さん、馬鹿は朝もはよから何で雪風呂に浸かってんの？もしかして自殺志願者？」

「似たようなもんだ、俺がやったからな。」

「そりゃ自殺志願者だ。で、このちびっこたちは何？」

「外の馬鹿を葬るお手伝いをしてくれた勇者たちだ、朝飯くらいは出してやらねば。」

「それは素晴らしいぼつやたちだ。お疲れ君たち、ゆっくりしていきたまへ。」

『はい！』

「なあなあ外でホカが伸びてるんだけど。」

続いてやってきたヒロトとカオリにも同じように説明する。

二人も似たような反応をして、同じくちびっここの頭を撫でたりしていた。

開店してからやってくるお客さんは、楽しそうにご飯を食べる子供に和んでくれたようだ。

俺はその間、ちびっここの家に電話を掛ける、心配していると悪いからな。

さて、そろそろ馬鹿を回収するか。

扉を開けて、目の前の歩道を見る。

そこにホカゾノは居らず、代わりに馬鹿デカイ雪だるまが出来上がっていた、通行の邪魔この上ない。

雪だるまには小さなメモが刺さっていて、壊さないでね by 足長おじさんと書いてあった、この汚い字は間違いなくホカゾノだ。

「……足長くねえだろボケ。」

「あ、兄さんだ。」

声のする方を向くと、馬鹿が仕事もせずに二つ目の雪だるまを作成している。

俺はにつこりと微笑みかけると、完成している雪だるまの頭を渾身の拳で粉碎した。

「あー！」

「そしてトドメの回し蹴り。」

胴体も見事に破壊され、俺は満足気に笑いかけた。

「さあ、働け馬鹿。」

「その前に言うべきことがあるだろー！」

「お前の脚は短い！」

「そつちじゃねえよ!？」

「いつまでサボってんだカス。」

「傷心するウチを労れ！」

「ああ？」

「ごめんなさい。」

「黙れ、そして腐れ！」

「良いの兄さん？ウチ腐るよ？かつてない腐臭が兄さんを襲つよ？」

「ああうん早く腐れよ。」

「酷い！もう少し悩んでよー！」

「……………はい、どうぞ。」

「悩むの一瞬！？もういいよ、働くよ。」

「初めからそう言えば良いんだよボケ。」

「これは立派な虐めだと思う。」

「なんだテメエ、まだぐだぐだとぬかすのか？」

「すみませんね。」

「とりあえず厨房行って昼の準備だ、忙しくなるかは判らないが。」

「この雪じゃ外に出るのも億劫だからね。」

「せっかくだしこの雪を利用するか。」

「え、どうすんの？」

「昼のピークが終わってから始めるから、まずは店に戻るぞ。」

案の定昼はそれほど混まなかった、まあこの雪じゃ仕方ないだろう。さて、ここからは楽しいイベントといこうか。

俺は店の前に一枚の看板を出した。

雪玉当てゲーム！ウチの従業員に三回投げて一回でも当たれば飲み物一杯無料サービス！お一人様一回まで！

よし、後は呼び込みをかけよう、名前が売れば問題ない。

「いらつしゃいませー！只今本限定のイベントを開催しております！よろしければ是非一度遊んでみて下さいませー！」

「そこのお兄さん、ちよつと遊んでいけよー！」

「飲み物一杯無料だよー！」

「面白そうなことやってるな。」

「お、何かまた騒いでるなああの集団は。」

騒ぎを聞きつけて、続々と人が集まってくる、ノリが良い人達だ。一通り集まったところで俺は前が出る。

「それじゃルールの説明をしますよ。まず雪玉は三個まで、大きさ

は自由、投げるタイミングも自由、一度に複数投げてもいいし、投げられるなら雪だるまみたいな大きさでも構いません。但し中に物を入れたり禁止、石とか入れたら流石に化け物でも痛いですが。」

「そうどうぞ。いくら神の如く慈愛に満ちたウチでもちよつと痛いパンチとかしちゃうぞ。」

「死にたくなかったら余計なことはすんなよな、お兄さんとの約束だぜ！」

「このように血気盛んな馬鹿共ですので、自重していただけたらと思います。投げる距離は10メートル、子供は半分の5メートルにしましょう。では私が試してみます、やってみたいと思う方はあちらにある受付に名前をお願いします。」

俺はカオリが用意したテーブルを示すと、早速ホカゾノと向き合う。

「兄さん、ウチに当てるなんてさせないよ。」

「おいおい、これはデモってやつだ、お前が避けたらダメじゃないか？」

「だがあえてウチは避ける！兄さんに当てられるなんて何か尺に触るぜ！」

「……………なら避けられないようにする、覚悟を決めろ。」

調子に乗ったうつけには灸を据えてやるう。

「食らえ！我が渾身の雪だるまの下半身！」

「下半身デカっ!？」

「……………サイテー。」

「くたばれ……………ゴミがー！」

俺は2メートルはありそうな雪玉を、ジャンプして上から片手で思い切り投げ込んだ。

ホカゾノは回避の為に身構える、ふふん、馬鹿を罫に嵌めるのは容易いぜ。

更に俺は石のように硬くした小さな雪玉を、先に投げた雪玉に投げる。

一点突破、初めから脆く作った雪玉は派手に砕け、欠片は雨のようにホカゾノへと降り注いだ。

不意討ち、更に広範囲攻撃。

ルールは破ってない、使った雪玉は二つだけだ、誰もやらないだろうが。

当然雪玉の欠片は命中し、ホカゾノは悔しそうに唸った。

「このようにとにかく当てれば良いので、頭を使って頑張ってください。」

「何十キロもある雪玉を10メートルも投げれる化け物は兄さんくらいだ！」

「おやおや、負け犬がみつともなく言い訳してるわ、ぷぷつ。」

「マジもうぜってー当たらねえ！」

「大丈夫ですお客様。こいつ人間離れた身体能力はありますが、頭は救いようがないくらい空っぽですので、策に嵌めれば勝てますよ。」

「おっしや、なら俺からやらせてもらうぜ！」

熱いお兄さんが早速チャレンジ、他の人も結構参加してくれそうだ。存分に身体を動かせるし、ついでに鍛練にもなって一石二鳥だ、暇を持って余すよりはマシだろう。

「俺は昔野球部のピッチャーだったんだ！食らえ俺の速球！」

「ハイハイ、カマンツ！ウチに当てたら我らが兄さんの熱い抱擁を受ける権利をやるぜ！」

「あんな化け物に抱擁されたら死ぬわ！」

「お客様……頑張って当ててくださいね。」

「ちよつ、マスター、落ち着いてくれよ。」

「あーあ、余計なこと言うから。」

恐怖に打ち勝てずピツチャー凡退。

その後もちびっこや商店街の熱いオツサン達が次々にチャレンジ、中にはガチで当ててく人もいたくらいだ。

俺が使った手を実践してる人もいた、かなりのコントロールだ、雪玉が小さい分当てるのは難しいだろうに。

50人くらいチャレンジして、当てたのはその内15人くらい、結構頭を使った人が多かった。

しかし、ふふふ。

お陰で店の前は随分雪が減った、これで雪かきも楽になるぜ。

真の勝者は俺って感じだな、あはははははは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7606x/>

Fratres フラトレス The Crazy Cafe

2011年10月30日02時16分発行